

日本教育新教科書

心理學綱要

文藝博士  
乙竹岩造著



培風館

5  
20

41186

教科書文庫

4
130
51-1938
20000 22349

513

1130

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

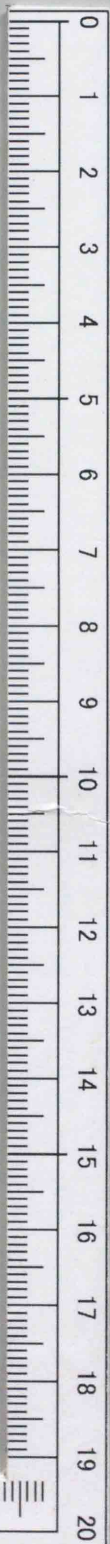
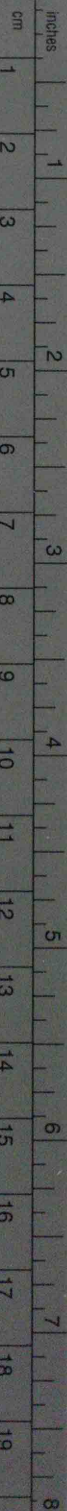


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





用科育教校學範師 日三十二月二十年三十和昭

濟定檢省部文

# 書科教新育教本日

## 要綱學理心

士博學文

著造岩竹乙

教科書文庫

4

130

51-1938

2000022344

広島大学図書

2000022344



館風培

資料室

375.9  
0615 -





無我 横山 大觀 筆

廣島大學  
圖書印





## 序言

一、本書は、我が國の師範學校及び教員養成所に於ける尋常小學校本科正教員の養成を目的とする教育の教科書として、昭和十二年三月改正せられた師範學校教育教授要目に準據して新に編纂したものである。

一、本書は、教育學綱要、學校管理法綱要、各科教授法綱要と特に緊密の統合聯關を保たせ、四者相俟つて教育各分科の要領を悉く網羅包括せしめることに努めたものであつて、日本教育新教科書中の一系統を形造つてゐるのである。

一、本書から更に一步を進めて研究しようとするのには、日本教育新教科書心理學を參考するのが最もよい。蓋し兩者は同一の用意



と方針との下に、唯程度だけを異にして、編纂したものである。

昭和十三年十月

著者 乙竹岩造 識す

目次

第一篇 心身の相関……………一

第一章 心理學とは何か……………一

第二章 心意と身體……………二

第三章 發達に於ける心身の相関……………三

第四章 機能としての心身の相関……………七

第二篇 認識……………九

第一章 認識の概説……………九

第二章 意識……………一〇

第一節 意識の意義……………一〇

第二節 意識と無意識……………一一

第三章 注意……………一二

第一節 注意の條件と意義……………一二

第二節 注意の律動と推移……………一四



第三節	注意の範圍と身體的調節	一五
第四節	注意の發達	一七
第四章	感覺	一八
第一節	感覺の意義と種類	一八
第二節	皮膚覺	一九
第三節	味覺と嗅覺	二三
第四節	聽覺	二五
第五節	視覺	二六
第六節	有機感覺	二六
第七節	運動感覺	二七
第五章	知覺	二八
第一節	知覺の意義と種類	二八
第二節	空間知覺	三〇
第三節	時間知覺	三三
第四節	知覺の錯誤	三四

第六章	觀念	五〇
第一節	觀念の意義	五〇
第二節	觀念の把住と再生	五一
第三節	觀念の聯合	五三
第七章	記憶と想像	五五
第一節	記憶	五五
第二節	想像	五八
第八章	思考	六四
第一節	思考の意義	六四
第二節	概念	六五
第三節	判斷	六六
第四節	推理	六七
第五節	思考と言語	六九
第三篇	感情	七一
第一章	感情の概説	七一



第二章	簡單感情	七
第三章	情緒	七四
第四章	情操	七九
第四篇	意志	八五
第一章	意志の概説	八五
第二章	運動	八六
第三章	衝動と本能	八九
第一節	兩者の關係	八九
第二節	本能の特質と種類	九一
第四章	執意	九三
第五章	習慣	九六
第六章	性格と氣質	九八
第七章	個性	一〇二
第五篇	社會の心理	一〇四
第一章	社會心意	一〇四

第二章	社會意志	一〇五
第六篇	環境の心理	一〇八
第一章	環境の意義	一〇八
第二章	環境の力	一〇八
第三章	環境の心理と教育	一一〇
第七篇	學級の心理	一一三
第一章	學級の構造	一一三
第二章	學級の性格	一二四
第三章	學級の心理と教育	一二七
第八篇	學習の心理	一二九
第一章	學習の概説	一二九
第二章	學習の種類	一三〇
第三章	作業の學習	一三四
第四章	疲勞	一三六



第九篇 心性考查……………二六

第一章 心性考查の意義……………二六

第二章 知能考查……………二六

第三章 情意考查……………二六

第四章 心性考查と教育……………二六

第十篇 發達の心理……………二五

第一章 心意發達の概説……………二五

第一節 心意發達の意義……………二五

第二節 心意發達の段階……………二五

第二章 幼兒期の心理……………二六

第一節 幼兒期の概説……………二六

第二節 幼兒の情緒生活……………二六

第一 幼兒の情緒……………二六

第二 幼兒の欲求……………二六

第三節 幼兒の知的生活……………二六

第一 幼兒の知覺と注意……………二六

第二 幼兒の記憶と想像……………二六

第三 幼兒の思考……………二六

第四節 幼兒の遊戲と運動……………二六

第五節 幼兒の數と言語……………二六

第一 數……………二六

第二 言 語……………二六

第三章 兒童期の心理……………二五七

第一節 兒童期の概説……………二五七

第二節 兒童の情緒生活……………二五九

第一 兒童の情緒……………二五九

第二 兒童の欲求……………二六三

第三節 兒童の知的生活……………二六六

第一 兒童の知覺と注意……………二六六



第二 兒童の記憶と思考……………一六六

第四節 兒童の遊戯と作業……………一七〇

第五節 兒童と環境……………一七三

第四章 青年期の心理……………一七四

第一節 青年期の概説……………一七五

第二節 青年の感情生活……………一七六

第三節 青年の知的生活……………一七七

第一 青年の知覺……………一七七

第二 青年の思考と想像……………一七八

第三 青年と自我の發見……………一八〇

第四節 青年と社會生活……………一八一

第一 青年と道德……………一八一

第二 青年と宗教……………一八三

第三 青年と政治……………一八三

第四 青年と職業……………一八五

第十一篇 職業選擇の心理的基礎……………一八六

第一章 職業と性能……………一八六

第一節 職業の分化……………一八六

第二節 性能の個人差……………一八七

第二章 職業の分析と適性検査……………一八八

第一節 職業の分析……………一八九

第二節 適性検査……………一九〇

第三章 適性適職の心理的效果……………一九一

第一節 個人的效果……………一九一

第二節 社會的效果……………一九三

附 錄 練習問題……………一九三

〔目次終り〕





新日本教科書 心理學綱要

第一篇 心身の相關

第一章 心理學とは何か

心理學 吾等は窓外の櫻花を眺め、或は小鳥の聲を聽いて、これを知ると共に、美しいと感じ、又はそれを欲しいと思ふ。かゝる心の働きを心意作用といふ。心理學とは、この心意作用及び行動を研究して、これに關する知識を組織的に述べたものである。それ故に、心理學の知識を學び、且教育上へのこれが應用の途を考へるのは、吾等にとつて極めて大切なことである。



## 第二章 心意と身體

人間の心身 吾等は往々人間をば、心意と身體との二つの部分に分けて考へてゐる。即ち、骨格や筋肉から成る頭部、軀幹及び四肢の總てを身體といひ、それを活動させる内部の働きを心意といふ。併し人間は、心意と身體との違つた二つの部分が唯寄り集まつて出來てゐるものではない。心意といひ身體といふも、本來分けることの出來ぬ、謂はゞ人間といふ全一體の働きの兩面である。故に、兩者その何れを缺いても人間とは言はれない。

その内省 試みに身體の一部を抑へて見よ。觸れられた部分は皮膚であり、抑へられたところは筋肉である。併し、觸れられたと感じ、抑へられたと思ふものは心意である。その場合、心意と身體との區別はどこにあるか。觸れられる皮膚や抑へられる筋肉なしには、觸

不可分の全一體能

れられたといふ心意、抑へられたといふ心意は起らない。又心意がなければ、よし皮膚があつても筋肉があつても、觸れられたとも抑へられたとも感じない。物を書いたり話をしたりする場合も、全くこれと同様である。書くといふ指先の働きは、一々心意の命令であり、話す場合の口の動きも、そのまゝ心意の働きである。又頭が痛む、腹が減つた、風邪をひいた等の場合を想ひ起して見るがよい。頭が痛むとは、單に血液循環の不順を來したことだけではない。直に判断や思考の心意の働きを鈍からせ、運動や仕事の身體活動を中止させるではないか。腹が減つた、風邪をひいた等の場合も、心身の働きは亦同じである。かやうに、心意と身體とは、常に一體となつて現れ、その間に別個獨立の活動は見られないのである。

## 第三章 發達に於ける心身の相關



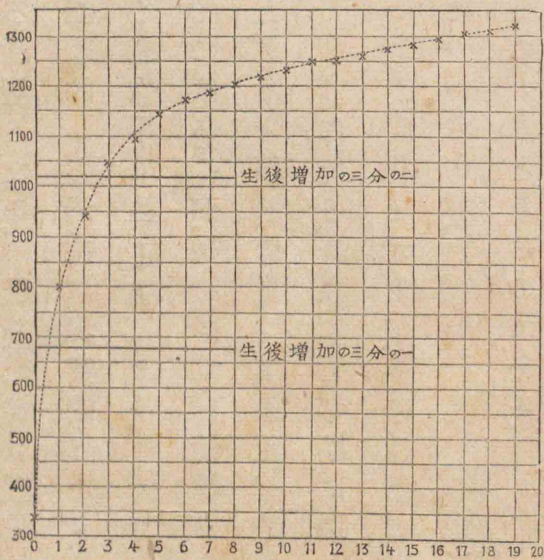
幼兒に於ける心身相關の發達

心身の發達 心意と身體との關係は、發達して行く人間について見ると一層よく判る。誕生直後の乳兒に見られるものは涕泣及び手足の運動だけであるが、數箇月後には頭も眞直に保たれ、十箇月目には立ち、一年後には次第に歩行を始めるに至る。かくて四五歳頃になると歩行・疾走・跳躍・把握等の基本的な運動が熟練し、七歳頃になると特に四肢の筋肉が發達して、運動の速度も大きくなり、これが統御も巧みとなり、手や足の微細な運動が行はれるやうになる。これを心意の方から見れば、生後數箇月の乳兒は感覺及び最も簡単な感情によつて生活し、記憶の働きは猶極めて漠然たるものであるが、二歳頃になると知覺・判斷の働きが進んで來て、人を見別けるやうになり、三歳頃になると言語の習得が殊に目ざましくなる。そして稍日常の言語に通ずるに至り、又好奇心が盛に發動して、しきりに質問を發するやうにもなる。やがて四歳を超えると、外界に對する反應が鋭

運動機關と腦髓との相關の發達

第一圖の說明  
下の數字は年齢の數字は重量のグラム

第一圖 腦髓の重量の發達の圖



敏となり、摸倣性・遊戯性が著しく現れて來る。知的作用も大いに發動し、意的行動も亦益々自由となる。かゝる心意的活動は初めに述べた運動機關の發育と兩々相俟つて發揮されるのであるが、それは一に、この時期の腦髓の著しい成育によるものである。即ち腦髓の重量の増加は、實に第一圖に示した如く、乳兒が滿一歳に達する前に於て、既に生後増加の三分の一を超え、滿三歳に至つては優に三分の二を突破し、滿七歳になると五分の四に及ぶ事實に基づくものである。



兒童青年に於ける心身相關の發達

次いで兒童期に入ると、身長も體重も頗る増加し、永久齒も完成し、身體的に益、整へられるやうになる。これと相俟つて心意の働きも亦頗る活潑となる。即ち、記憶は機械的から次第に合理的となり、想像は空想的から漸次に現實的となり、又讀書力・發表力の増加と共にその心意作用は益、正確となる。情意の方面も亦發達し、一般には猶主我的ではあるが、併し同情・愛情等の念が高まつて次第に社會的となり、且經驗を積むに従つて、慾望を適當に制御して、稍自律的の行動をするやうになる。更に青年期に進むと、種族本能が現れ、身體上に著しい發育變化を示して、遂に成熟の域に達するのであるが、心意の働きについても亦、自我が發現し、心意活動に於て殆ど完全に獨立して、一個の人間となるのである。

かくの如く、身體の生育と心意の發達とは、各時期を通じて一體となつて進み、一方が停止し他方のみが發達するといふやうなことはない。これ身體は心意の表現であり、心意は身體で保持されるからである。

#### 第四章 機能としての心身の相關

全一機能の兩面 前章で説いたやうに、心身は一體となつて生長し、その何れの時期を見ても、別々に發達するといふことがない。これ身體は唯、心意の宿るところであり、心意は身體を支配するといふやうな、對立關係にあるものでないからである。心意は手足の指の先に至るまで貫流してゐて、指一寸足一步でも、身體の運動は皆これ心意の働きであり、然もそれは指とが足とかの運動に限られたものでなく、必ず人間といふ全一體の働きの部分であり、その全一體からして、始めて意味が與へられるのである。

吾等の心身は、これを精巧な一つの装置に譬へることが出来る。

精巧な全一装置としての心身



機能

即ち、外界の事物を感じ容れる働きと、自分の考を外に現はす働きと、この二つの働きを營む精巧靈妙な一つの装置と考へられる。かゝる働きを機能と稱する。そして、この二つの機能の十分に行はれるのが、よく利く心身であり、どこかに故障のあるのが、よく利かない心身である。これを神経の作用に見れば、神経には、神経原に於て、感覺を掌る方面と運動を掌る方面とがある。そして、神経系統の中樞には、腦髓があり、末梢にはあらゆる感覺並びに運動の機關、即ち眼・耳・鼻等の感覺の機關と、手足・口等の運動の機關とが結び付いてゐて、吾等の心身は、これ等の神経や機關によつて始終、刺激を受け容れると共に發表をなし、この受容と發表とによつて、絶えず活動もすれば發達の全一的な完全な装置であると見なければならぬ。

受容と發表

## 第二篇 認識

### 第一章 認識の概説

刺激と反應 總て生物は、その存在を維持するために外界の刺激に對して反應をなすもので、アミーバの如き下等動物でさへ、既にこの機能をもつてゐる。そして生物は環境の變化に順應して、生存競争に堪へ得るものゝみが淘汰を免れるのであるから、その刺激に對して反應する機關も亦、漸次に複雑に發達して來る。既に昆蟲の段階に至ると、その感覺機關の種類の様も、ほゞ人類と同數になつて來てゐる。

外界の認識 かくの如く、機關が複雑となるにつれて、その機能も亦次第に複雑となつて來るもので、吾等人類に至つては、單に刺激に反

化物的進化  
うろざり  
同様の  
可なり

可なり  
可なり



應するだけでなく、外界に關係して種々のことを知つたり、考へたりする心意の働きをもつてゐる。かゝる心意の働きが即ち認識で、それは感覺からして高等な知的作用に達するものである。

### 第二章 意識

#### 第一節 意識の意義

(物に認識せしむる心働き)

意識 吾等の心意は、自ら嬉しいと感じ、何かを欲しいと思ひ、或は物を見たり、聞いたり、考へたりするのであるが、かゝる心意の働きは、常に何か或物に關係して起つて來るのである。「欲しい」といふ心意の働きは、欲しい何物かについての心意の働きであり、物事を見たり、聞いたり、考へたりする心意の働きも、それぞれ、その物事についての心意の働きである。併しこゝにいふ物とは、吾等の外界にある物とのみは限られない。例へば、想像も心意の働きであるが、その際想像せ

対象

られたものは存在しない。然も心意は想像せられたものに向けられてゐる。かゝる心意の働きを意識といひ、その意識されるものを対象といふ。即ち意識とは、何物かについて知ることであり、知り得たものを意識としてもつてゐることである。一切の心意の働きは皆この意識の中に含まれてゐる。

#### 第二節 意識と無意識

無意識 前に述べたやうに、意識は何物かについて知る働きで、目ざめてゐる場合の明かな體驗をいふ。併し吾等の心意の働きは、これだけではない。或物がはつきり心に浮ぶまでの微かな體驗とか、明かな対象の意識の去つた後の朧げな體驗とか、或は一つの意識から他の意識に移る過渡の體驗とか、或は夢の體驗などに至つては、それが明かに捕へられないから、何も體驗しなかつたやうに考へられる。

眼ざめてゐる明かな體驗



不明瞭な意識體  
驗

併しこの不明瞭な意識體驗は、明かな意識の地盤をなしてゐて、吾等の意識に大きな割役を演じてゐるのである。かゝる不明瞭な意識體驗を無意識と名づける。故に無意識とは、明かな對象として把握し得るほどに氣付かれない漠然たる意識體驗であつて、全くの空虚を意味するものではない。

### 第三章 注意

#### 第一節 注意の條件と意義

注意の意義 競走の際に「用意」と叫ばれたとせよ。競走者はこの合圖が發せられると同時に、雑多な心意活動を一切止めて、唯命令者から次に來る出發の合圖に反應しようとして、命令者を明瞭に意識する。この際の競走者の心意情態は、極度に鋭い意識情態であつて、然も準備的選擇的である。かやうな心意情態を注意と名づける。即

ち一事物に注意することは、その事物を鋭く意識すること、更に何か或物を期待することである。

注意の條件 一般に注意を惹き起させる條件を挙げると、次の如くである。

- 一、刺激の強いこと。
  - 二、刺激の大きいこと。
  - 三、刺激が反復されると、單純な刺激の強さを増したのと同様の効果がある。例へば建物の裝飾に於て、同じ様式を繰返す時は、一層注意を惹くものである。
  - 四、定まつた形は、漠然たるものよりも注意を惹き易い。
- 以上に於て述べたところは、天賦的のもので、自然に注意を惹くものである。然るに人は又、注意する價值のあるものは何かといふことを學んで、價值あるものに特に注意を向けるやうになる。



### 第二節 注意の律動と推移

注意の波

注意の律動 一つの事物に對し同一の程度で注意を持続することは、出來難いもので、必ず或時は強く又或時は弱く、互に交代して進み行くものである。例へば、時計の音に高低を感ずるのでも判る。これを律動又は注意の波と稱し、その長さは、強い刺激にあつては十八秒乃至二十四秒、弱い刺激にあつては三秒乃至六秒で、平均五六秒である。そして、一日一週、二年等の期間に於ても、それぞれ律動は表れるものである。

變化と興味

注意の推移 かく一つの事物に對して永く注意を持続することが出來ぬに拘らず、吾等が數時間讀書を續けることの出來るのは、何故であるか。これ、その内容に變化があり、且それに吾等が興味をもつからであつて、注意は實に絶えず新しい對象に向つて移動しつゝあ

るのである。兒童が物に倦み易いのは、人のよく知ることであつて、成人に於ては、現在の慾望及び興味によつて、比較的長く注意を持続し得るのである。さうして見ると、課業に興味をもたせることは、兒童の教育に於ては極めて重要である。

### 第三節 注意の範圍と身體的調節

注意の範圍 同時に注意し得べき事物の數には限りがある。實驗の結果によれば、意味の聯絡ある文字は、同時に六字乃至九字を認めることが出來、その聯絡のない文字は、五字以上認めることが出來ぬ。尙、漢字は假名よりも注意を惹き易いし、片假名は平假名に比べて注意の範圍が廣い。又、音は一秒に六音を聽取ることが出來、皮膚の感覺は一觸に六點を感知することが出來る。それ故に、點字の如きも六個の組合せがよいのである。

一度に認め得る文字の數

一度に聽き得る音の數



感覺機關の調節

頭軀四肢の調節

内臓機關の調節

注意の身體的調節 吾等が何かに注意を向ける時には、感覺機關がその刺激に對して反射的に調節作用をするものである。例へば、或物を注視する場合には、眼球は自らそれに向ひ、水晶體を調節して、その對象の把捉を容易ならせる。次に、頭部イノコノカウイ・軀幹クダク・四肢シタも亦調節されて、所謂注意の姿勢を取るのである。例へば、自ら頭を注意する方に向け、微かな音にも耳を傾け、不用な運動を中止する等は、何れも皆それである。その上、内臓機關も亦反射的にその作用を變化するのである。例へば、視覺の注意の際には、呼吸が靜かとなり、一時停止することさへもあり、又聽覺の注意の時には必ず呼吸の速さが減ずるのである。その他、一般に有意注意の場合には、脈搏ミヤウチや血行の上にも變化が起り、又眉を寄せたり、顎や喉の筋肉を收縮させたり、眼を閉ぢたり、腕を組んだり、様々個人的に特徴のある身體的表出をするものである。

第四節 注意の發達

注意の發達 注意は心意の發達に伴つて發達する。先づ感覺的刺激に對する天賦的の無意注意から始まり、年齢を増すにつれて次第に有意注意に進むものである。例へば、乳兒は強烈な音又は玩具等にのみ注意するが、六七歳に達すれば、諸種の事柄に對して努力を用ひて注意することが出來、更に進んでは、己が意のままに注意を集中し得るに至り、轉じて第二次無意注意の域に達するものである。第二次無意注意とは、始め努力を要した注意も、練習するに従つて、遂に注意を用ひずともよく注意し得るに至つた情態である。

林檎が樹から落ちることは太古から變らぬ現象であるが、ニュートンの注意を俟つて、それが引力發見の動機となつたといはれ、鐵瓶の湯氣が蓋を押上げるのは昔も今も同じであるが、ワットの注意に

第二次無意注意



よつて、それが蒸氣機關發明の機縁となつたと傳へられてゐる如く、  
注意の發達は實に知能啓發の關門である。

#### 第四章 感覺

##### 第一節 感覺の意義と種類

感覺の意義 感覺とは、皮膚・口・鼻・耳・眼・筋肉・内臓器官等の感官に受け  
た刺激によつて惹き起された感覺神經の興奮が、大脳皮質に達した  
時、直に生ずる最も簡單で原始的な心意作用である。刺激とは、感官  
に受理されて心意的反應を呼び起す機會となる身體内外の出來事  
をいふ。

感覺の種類 身體内外の出來事が惹き起す感覺は、その出來事が傳  
達され媒介される感官の性質によつて一様でない。例へば、電流を  
耳に通ずれば響として聞え、眼に通ずれば光として見える如く、同一

刺激の意義

の刺激も、或範圍内に於ては、感官の種類によつて異なる感覺を生ず  
るものである。それで感官によつて感覺を分類すると、皮膚覺・味覺・  
嗅覺・聽覺・視覺・有機感覺及び運動感覺となる。

##### 第二節 皮膚覺

皮膚には數種の感覺器官が分布してゐて、何れも特殊の刺激に對  
して特殊の感覺を起すものである。即ち、これを溫覺・冷覺・壓覺・痛覺  
の四種に區別することが出来る。又それ等四種の皮膚覺を總稱し  
て外觸覺と呼ぶこともある。

二、溫覺及び冷覺 體溫以上の溫度をもつた針金又はペン先で軽く  
皮膚に觸れると、處々に温かく感ずる點のあることを覺える。これ  
が溫覺で、この點を溫點といふ。次に、その溫度を體溫以下にして再  
び皮膚に觸れると、又處々冷やかに感ずる。これが冷覺で、その感ず

四種の皮膚覺

外觸覺

溫點



冷點

る箇所を冷點といふ。 温點冷點の最も密に分布してゐるところは、  
眼瞼、額、頬で、それに次ぐのは胸、腹、腕、手である。 これに反して、その最  
も粗なところは足及び下腿である。 概して温覺は冷覺に比して快  
感を與へるものである。

温覺冷覺の順應性

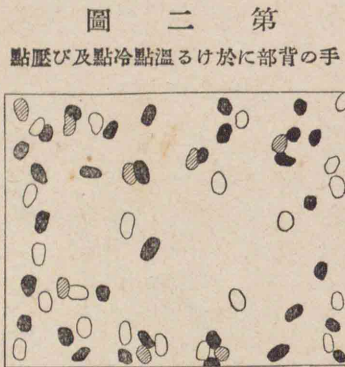
一定の皮膚に於ける或時の温度を、その時の生理的零點といひ、そ  
れより高いか低いかでなければ、吾等は温冷を感じることが出来ぬ。  
生理的零點は普通攝氏三十度内外のところである。 又温覺や冷覺  
には順應性がある。 ほと同一の温度をもつた井水を、夏は冷たく冬  
は温かく感ずるのは、即ちこれがためである。

痛點

二、痛覺 馬尾毛の如きもので皮膚を壓すると、處々に痛みを感ずる。  
これが痛覺で、その感ずる點を痛點といふ。 痛點の分布の最も密な  
ところは眼の角膜で、頬の内面の粘膜炎には全くこれを缺いてゐる。  
如何なる刺激でも、その強度を増すと痛覺を生ずる。 例へば、極め

痛覺の特色

第二圖の説  
白線、温點  
黒線、冷點  
壓點



て冷やかな水又は強い電氣に觸れると、痛みを覺えるが如きである。  
蓋し、如何なる刺激も、一定度を越えると身體に害を及ぼすものであ  
るから、痛覺によつて劇しくそれが感知され、かくして警戒が皮膚に  
與へられるのである。 痛覺には順應性がな  
く、又刺激を受けてから感覺に表れるまでの  
時間が他に比して稍長く、且刺激の去つた後  
も暫らくは猶強い痛みの續くのが特色であ  
る。

壓點

壓覺の順應性

三、壓覺 短い毛状のもので皮膚を押すと、處  
々に壓を感ずる。これが壓覺で、この點を壓點といふ。 壓點の分布  
は、場所によつて粗密がある。 舌尖、指尖、唇等には最も密で、膝、足、背の  
中央等には粗である。 壓覺には順應性がある。 例へば、吾等が常に  
着てゐる衣服の重さを感じず、又眼鏡の壓を覺えざるが如きこれで

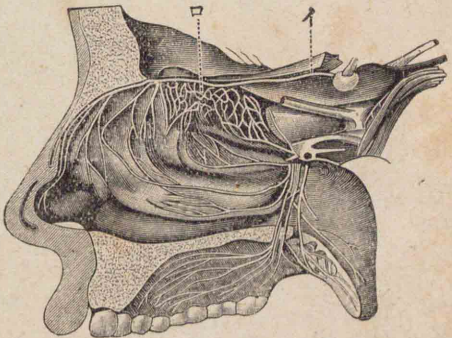






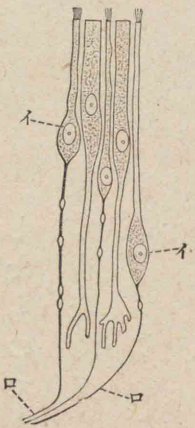
第六圖の說明  
イ、嗅神經の  
分枝  
ロ、嗅細胞

第六圖  
嗅神經の分布



第七圖の說明  
イ、嗅細胞  
ロ、嗅神經纖維

第七圖  
嗅細胞に於ける嗅神經



第八圖の說明  
イ、嗅細胞  
ロ、嗅神經纖維  
ハ、毛細胞  
ニ、神經纖維起

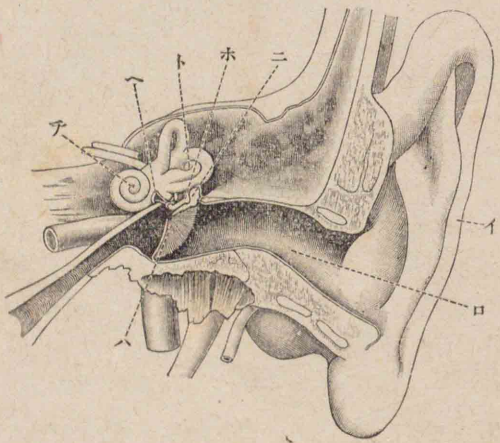
第八圖  
一個の嗅細胞



嗅覺は、これを分類することは難かしいのであるが、それを香料の臭ひ、花の臭ひ、果物の臭ひ、樹脂の臭ひ、醜惡の臭ひ(硫化水素に於けるが如き)、焦げる臭ひ等と分けてゐる學者もある。  
味・嗅の二覺は、生命保存の上には缺くべからざるものであるけれども、知能啓發の上から見れば、その價値は遙かに他の感覺に及ばない。それ故視・聽の諸覺に比して、これを下等感覺と呼ぶこともある。

第九圖の說明  
イ、耳鼓道  
ロ、錘骨  
ハ、砧骨  
ニ、三聽骨  
ホ、蝸牛殼  
チ、蝸牛殼管

第九圖  
聽覺器官の構造



第四節 聽覺

聽覺とその感官

聽覺の感官は

耳で、聽神經は耳の蝸牛殼内に分布してゐる。蝸牛殼を縦斷して見ると、それは第十圖の如く、ライスナー氏膜と基礎膜とによつて三室に分れてゐる。基礎膜は、上に至るに従つてその幅が廣く、これを構成する纖維は約二萬の多きに達するといふ。即ち、恰も長さの違つた無數の弦を有する樂器の如く、短い纖維は高音に、長い纖維は低音に共鳴する。コルチ氏弓に支へられた有毛細胞は、その振



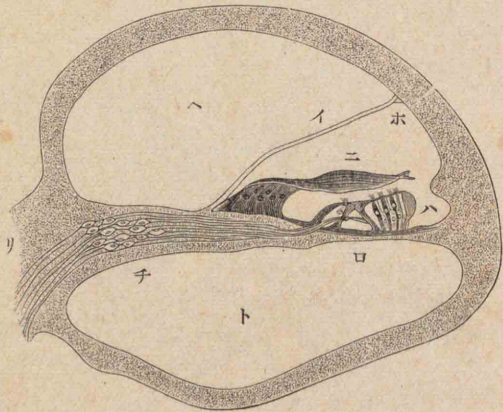
調音と噪音

第十圖の說明

イ、ライエスナ  
 ハ、コルチ氏  
 ニ、コルチ氏  
 ホ、蝸牛殻  
 ヘ、前庭道  
 ト、鼓室道  
 リ、聴神経

聲域の發達

第十圖 蝸牛殻の縦斷面



發達し、十五六歳に至つてほぼ完成する。又同一の年齢でも、人々によつてその差異は甚だ大きいものである。

動を聴神経に傳へて、聴覺がこゝに成立つのである。  
 音の種類 音には調音・噪音の二種がある。樂器又は音叉から生ずる音の如く、空氣の振動の規則的なものが調音で、吾等の母音はこれに近い。又馬車の響、井戸車の軋る音の如く、その振動の不規則的なものが噪音で、吾等の子音はこれに近い。

聲域 人間の發し得る聲の最高から最低までの間を聲域といふ。聲域は六歳頃から十歳頃までは漸次高音の方に擴げられ、それから低音の方にも

音の性質 音の性質には高低・強弱・音色の三つがある。

一、高低 同じ歌を歌ふにも、男子の聲が女子の聲よりも低いのは、高低の差である。これは音波の長短、即ち一定時間に於ける振動數の多少によつて生ずるもので、吾等の感じ得べきは、一秒間の振動數が凡そ十六から三萬に至るものである。併し耳が最も感じ易い音は、一秒に一千乃至四千振動數の音である。

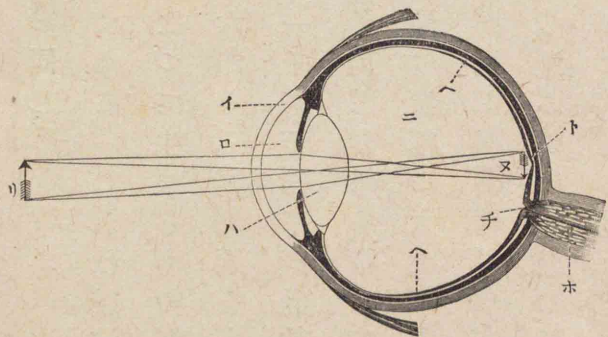
二、強弱 同じ弦でも、弾き方によつて違ふのは、強弱の別である。これは音波の振幅に大小の差を生じ、従つて音の強弱を來すのである。

三、音色 同じ高さ同じ強さの音でも、オルガンとヴァイオリンとでその音の違ふのは、音色の相違である。調音は、吾等の耳には單一の音のやうに聽えるけれども、實は單一なものでない。最も低いながらも強く響く基音と、これに伴ふ陪音との融和したものである。音色は、この陪音の性質・強弱・多少の比例によつて生ずるのである。



説明第十一圖の  
角水膜 晶状體 瞳孔 網膜 中央小窩 視神經 眼物像

第十圖 視覚器官の構造と物の映寫



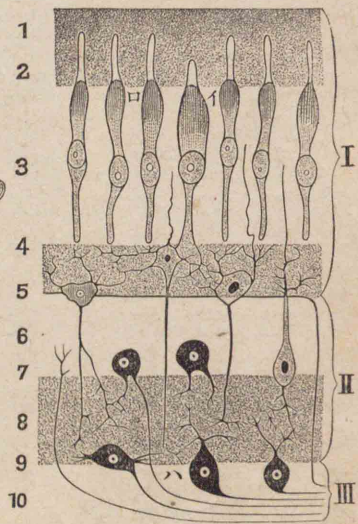
耳は、人の情的生活の上にも多大の關係を有するもので、美妙的な音  
樂や流暢な談話が如何に吾等の心情を動かすかを見ても判るので  
ある。一般に、兒童は音樂や談話を愛  
好するから、教育に於てはこれらを利  
用し、常に發音を正確精整ならせ、唱歌  
によつて耳を練磨し、耳と發聲機關と  
の十分な結合を圖るべきである。

第五節 視 覺

視覺とその感官光線(エーテルの振動)  
が眼に入る時は、網膜に分布せる視神  
經を刺激する。この刺激が神經中樞  
に傳達されると、視覺が生ずる。網膜

説明第十二圖の  
圓錐體 桿狀體 神經細胞

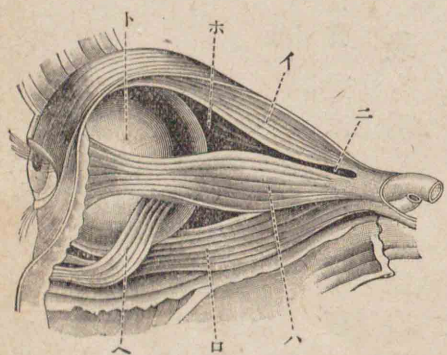
第二十圖 網膜の層



は、第十二圖に示した如く、大  
體に於て三層から成立ち、尙  
それを細分すると十層とな  
る。そして、圓錐體は色に感  
じ、桿狀體は光に感ずる。圓  
錐體の密集せる中央小窩(又  
は黄點)は、物像を感ずることが最も明か  
である。この外、第十三圖に示した如く  
三對の眼筋があつて、物體の映像を中央  
小窩に落させるために眼球を運動させ  
る。視神經の叢があつて入つて來てゐる  
部分は、圓錐體桿狀體を缺いてゐるから、  
全く光色を感じない。これを盲點と名

説明第十三圖の  
上直筋 下直筋 外直筋 内直筋 上下斜筋 下斜筋 眼

第三十圖 眼筋





第十四圖の  
 説明  
 左眼を閉ぢ右  
 眼で×を見詰  
 めつゝ近づけ  
 ば突然●は消  
 え失せる

第十四圖  
 盲點の實驗

× づける。その所在は、第十四圖に示した實驗によつて容易にこれを知ることが出来る。  
 ● 視覺の種類 視覺は光覺・色覺の二種に大別される。然も實際に於ては、この兩者は相結合して生ずるものである。

一、光覺 晝は明るい、夜は暗い。かく明るい暗いを知るを光覺といふ。最も明るい時は白で、最も暗い時は黒である。これ等兩者の間には灰・微灰・暗灰等の段階がある。練習を積むと、これを六百種乃至七百種にも差別し得るといふ。

二、色覺 種々様々の色片を取つて、各片を似通つた色に分けるならば、赤・青・褐・緑・灰等の群が出来らう。併しその群は、一から他に次第に移つて行つて、截然と切れ目を付けることが出来ぬ。即ち色は、一から他へと順次移り變るのである。従つて吾等は、これを判然

色の三系列

と分類することが困難で、それを系列し得るだけである。かくて色は、明度・色調・飽和の三方法に従つて系列される。

明度 光覺は單獨に經驗されるが、色は總て光覺と結合してのみ經驗されるもので、色を見てゐる際に光覺を無くする時は皆黒となる。そこで、色は光覺の度に應じて、明るい色から暗い色に至る系列に配列することが出来る。

色調 鮮明な色を用ひて、一つの色を置き、次に前の色調に似た色を置き、その次に前の色に最も似たものを列べるといふやうにして進む時は、色調の系列が得られる。若し吾等が赤から並べ始めれば、次の色は黄がかつた赤であるか、又は青がかつた赤かである。若し黄がかつた赤を取つて赤の次に置くなれば、尙多くの黄がかつた赤が來て、そして次に黄になり、それから綠・黄・綠・青・綠・青・堇・紫・紫がかつた赤となり、遂に赤に還るであらう。かやうに色調は、一つの色輪をなす

色輪







ら、漸次その色の感覺の少なくなるものを経て、純灰色に至るまでに並べることが出来るのであつて、これが飽和の系列である。

對比性質の相反した色覺及び光覺が並ぶ時は、各自の色彩・光度はこれがために一層引立つ。これを色の對比といふ。赤と淺黄、白と黒の如く、その他總じて互に餘色をなせる各色は皆さうである。この現象も亦、繪畫・裝飾等に常に應用されることで、第十七圖にその實例を示してある。

殘像 一般に感覺は、刺激が與へられると同時に起るものではなくて、所謂潜伏時間がある。又刺激が去つても、直に感覺は消え失せるものではなくて、感覺の殘留時間といふものがある。そして視覺にあつては、この殘留時間が殊に著しいので、これを特に稱して殘像といふのである。殘像には、原刺激と同一の光覺又は色覺を伴ふものと、これに反對のものがある。前者を積極殘像といひ、後者を消極

感覺の潜伏時間

感覺の殘留時間

積極殘像



消極殘像

殘像といふ。線香の火を振廻はすと火の輪に見えるのは、前者の實例であり、左圖の如き黒い四角を長く視つめて後、下の黒い十字を視ると、白く光つて見えるのは、後者の實例である。又、電燈の火を暫らく視つめて眼を閉ぢると、始は赤色の積極殘像が見え、次で餘色たる青色の消極殘像が見える。活動寫眞は、實に

第七十圖 殘像の實驗



色盲者の割合

前者の理を應用したものである。色盲色覺に缺陷のあるのを色盲といふ。就中、明暗の感覺のみがあつて色は全く辨別し得ないのを全色盲といひ、或色は感ずるが他の色は感じ得ないのを一部色盲といふ。但し、全色盲は總ての色を灰色に感じ、一部色盲の中では、赤と緑とを灰色に感ずる赤綠色盲が最も多く、外に、青と黄とを混同する青黄色盲等がある。何れも色盲検査表等を用ひてこれを検査することが出来る。色盲は、女子には

各種の職業と色盲

極めて稀であるが、男子には百人中三人又は四人の割合である。鐵道員、船員等色彩の信號によつて動作する職業に従事する者、又は教員、兵士等色彩の辨別を必要とする者には、嚴密な検査を要する。

直接視

間接視

視野の實驗

視野或一點を視つめる時、視覺に入つて來る外界の範圍を、その人の視野といふ。そして、その明瞭に視える範圍を直接視といひ、その他の視野の部分を間接視といふ。視野の廣狹は、刺激の種類によつて違ふ。今、人に一眼を閉ぢさせ、他眼で直ぐ前の一點を凝視させて置いて、赤色の小さな物を外の方から次第に凝視點に近づけて來ると、彼は最初にはそれを黒色と感じ、次には青黄に近い色と感じ、更に牡丹色、樺色と感じ、餘程近づけてから後に初めて赤であることを認める。綠色で實驗して見ても、その關係はほゞ同様である。さうして見ると、視野に帯があつて、最も外方の帯では明暗だけが認められ、次には黄及び青が認められ、赤及び緑の認められる範圍は最も狭い

視野の帶



ことが判る。即ち、總ての色の明瞭に認められるのは直接視の範圍で、間接視にあつては何人も或色の感覺を缺くものである。

### 第六節 有機感覺

有機感覺の性質 有機感覺とは、消化・呼吸・血行等の諸作用が身體の内部、即ち消化器・呼吸器・循環器等に分布せる感覺神經を刺激することによつて生ずる一種の感覺で、又一般感覺ともいふ。その刺激は概して総合的で、その感覺も亦漠然としてゐるが、刺激が強大であると、眩暈・饑渴・滿嘔・氣疲・勞倦・怠睡・氣等として著しく意識される。有機感覺は、他の感覺と異なり、その内容は分明でないが、これに伴ふ感情は頗る顯著で、所謂氣分と稱するもの即ちこれである。氣分は、直接には、知能啓發の上に價値が少ないやうに思はれるけれども、間接には、吾等の心身の活動を著しく支配するものである。

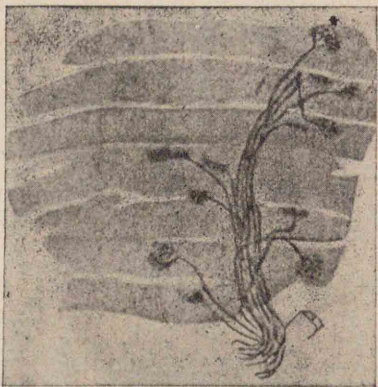
氣分

### 第七節 運動感覺

運動感覺の性質

これは、運動によつて生ずる感覺であつて、筋肉の

圖八十第 筋肉に於ける運動神經の末端



運動による筋覺、關節の運動による關節覺、腱の運動による腱覺等の總稱である。これ等は、常に相融合して現れるものであるから、一括して運動感覺といひ、時としては内觸覺ともいふのである。日用

圖九十第 腱に於ける感覺神經の末端



器物の使用を始め、書寫・談話・歩行は勿論、作は、一としてこの感覺の上に成立たぬものはなく、然も、その器用熟練の結果に至つては、靈妙眞に

内觸覺

運動感覺と吾等の日常生活

第十九圖の說明  
イ、腱感覺神經の末端  
ロ、その末端の筋肉纖維



驚くべき域に達するものである。

### 第五章 知覺

#### 第一節 知覺の意義と種類

感覺知覺

意味をつける作用

知覺の意義 吾等は馬を見ればそれを「馬」と知り、音を聞けばそれを「音」と知り、又は「ピアノ」の音としてこれを認知する。これ等の心意作用を知覺といふ。即ち知覺とは、現在せる事實を知ることである。直接に見えたり聞えたりしてゐる時には、これを感覺知覺といふことがある。例へば、眼の前にある「家」を見る時はこれを視知覺といひ、ピアノの音を聴く時はこれを聴知覺といふ。併し吾等は例へば太鼓の音だけを聞いて、音だけでなく、太鼓を知覺するのを普通とする。これ、明かにその音たる記號の意味を知つたものである。かやうに知覺とは感覺の解釋であり、意味をつける作用であるといつてよい。

空間知覺と時間知覺

位置の知覺の成立

局標

知覺の種類 外界の事物は、空間的に統一された時間的存在として知覺される。即ち、こゝに見る林檎は、或空間を占め、空間的に統一された一定の大きさをもつて球形をなし、一定の時間に於てこゝに靜止し若くは轉がりつゝあることを、吾等が知覺するのである。これを空間知覺及び時間知覺といふ。

#### 第二節 空間知覺

空間知覺とは、位置・大きさ・距離等空間に關する知覺である。

位置の知覺 位置の知覺とは、皮膚又は網膜の上に於ける刺激の點の位置を認知することをいふ。例へば、背に刺激を受けた感覺は、凡そその何處なるかを知り得るが如きである。これ、皮膚や網膜は、その刺激を受ける局處によつて、各異なつた局標をもつからである。局標とは、觸れられた場所に基づいて起る性質の特徵をいふ。そし



大いさの知覺の  
成立

て、この性質的に異なつて起る局標に、或は運動感覺が伴ひ、或はその局所の視覺心像が伴つて、一層これを明瞭ならせるものである。  
大いさの知覺 大いさの知覺は、眼の網膜と眼球の運動との結合、又は皮膚と手足との結合によつて知覺される。例へば、線の長さが違へば、網膜上の映像も違ひ、且眼球運動の度も違ふ。手に觸れた場合も、これと同様で、皮膚の局標が違ふと共に、手の運動の程度も違ふから、それによつて、その物の大いさを知覺するのである。

距離の知覺の成  
立

距離の知覺 距離の知覺とは、外界に存在する物體に至るまでの遠さの知覺である。蓋し、見るところの物體の遠近によつて、眼球の水晶體は種々に調節されるものであるが、その調節の度合によつて、距離が知覺される。又、網膜に於ける物體の映像は左右によつて異なり、その差は近いほど甚だしいのであるが、この差異の相違も距離の知覺の要素となる。その上、網膜上の映像は近いものほど大きい。

空間知覺と測定  
の標準

従つて、小さいものを遠方のものとして知覺するのは、普通、繪畫に於て理會されるのと同じである。尙且、遠い物體は不明瞭なのが常であるから、物の明瞭不明瞭も亦、距離の知覺に關係がある。雨後の空にくつきり姿を現した遠山を近いものと感ずるのは、この理である。又、視野の上部にあるものを遠いと思ひ、或物體に半ば隠れたものを遠くにあると知覺するが如きも、普通見られることである。その外、音の強弱によつても距離を知覺することが出来る。

空間知覺測定の標準 空間知覺は、上述の如く主觀的なものであるから、人により場合によつて、種々の差異を來すことを免れない。そこで、客觀的にこれが測定の標準を定める必要がある。その標準として、昔は前腕の長さ〔即ち尺〕、足の長さ〔即ち呎〕等を使つたが、今はメートル法度量衡の如き精確なものが廣く用ひられるやうになつたのである。



### 第三節 時間知覺

時間知覺とは、或現象の繼續・速度等を始めとし、過去・現在・未來等に關する認知をいふ。

經過中の時間の知覺經過中の時間の知覺は、主として聽覺及び皮膚覺・運動感覺等の緊張情態の變化、それに加へるに、呼吸等の律動に伴ふ感覺に基づいて起るのである。例へば、音が或間隔を以て發する時は、その第一音を聽き始める際に緊張の感を起し、聽き終つた際には弛緩の感を覺える。第二音を聽く時も亦同様である。この緊張弛緩の反復が時間知覺の基となる。そして吾等にとつて、この時間知覺を生じさせるのに最も重要な關係をもつものは、實に歩行運動である。歩行の際には、左右の兩足が交互に地に着く時の皮膚覺と、右脚と左脚とを運動させる際に起る運動感覺とが相結合して、緊張

緊張弛緩の反復  
と時間知覺の成  
立

歩行運動と時間  
知覺

弛緩の感を反復させ、かくて時間知覺を成立たせるのである。

回顧の際の時間の長短回顧する時の時間の長短は、心意内容の變化を標準とする。故に、同一の時間も、心意内容の變化が多い時は長く感ぜられ、少ない時は短く感ぜられる。けれども、現にその時間の經過中に於ては、これと反對で、多忙の際には短く感ぜられ、無聊の場合には長く感ぜられる。これ、多忙であると緊張の感が小さく、無聊であると緊張の感が大きいからである。時として、吾等が時の推移を過大に見積もることのあるのも、亦この關係からで、注視する鍋は沸騰しない。といふ諺の如きは、これを文學的に表現したものである。鍋は沸騰しないのではないが、緊張が餘りに大きくて、沸騰するまで待ち切れぬのである。兒童にはかゝる場合が甚だ多い。

時間知覺測定の標準かくの如く時間知覺も亦、主觀的で精確を缺くものであるから、客觀的のものによつて標準を定める。例へば、年は

時間知覺と測定  
の標準



四季の變化により、月は月の盈虧により、日は太陽の出沒によるが如きであつて、遂に進んで時計の發明を見るに至つたのである。又規則的生活は、時間の知覺を正しく導く上に與つて力がある。

#### 第四節 知覺の錯誤

錯覺 知覺の誤りの中で最も著しいのは錯覺である。錯覺は感覺的刺激に反應する際に、事實そこに無いものを有るとして知覺するから起るもので、これに次の二種がある。

正常錯覺

一、末梢的錯覺 これは、人たる以上何人も免れない共通的のものであるから、一に又、正常錯覺とも呼ばれる。例へば同じ大いさ、同じ長さのものが他との關係上、違つた大いさ、違つた長さの如くに感ぜられる等はこれである。かゝる錯覺は、その原因が全く生理的のものもあれば、又他の條件からして起るものもある。そして、生理的原因

末梢的錯覺の因由

にあつては、總じて感官の勤勞を多く要するものは、それを多く要せぬものよりも、長大に知覺されるのが常である。かくの如く、末梢的錯覺は錯覺ではあるが、併し何人にも存するものであるから、建築繪畫彫刻等から裝身化粧、手品、曲藝の類に至るまで、これを應用してゐるものが頗る多い。次に若干の例を擧げて説明しよう。

次頁の圖中、甲に於て、横線ロが同長な縦線イよりも短く見えるのは、眼の左右運動が上下運動よりも容易だからである。又乙に於て、ロが同長のイよりも長く見えるのは、イは眼球の運動を阻止するのに反して、ロは眼球の運動を増進させるからである。次に丙は、イ・ロ・ハの三點だけを眺めないで、イ・ロ間の諸點をも眺めるから、かゝる諸點をその中に含んでゐるイ・ロを過長視するのであるし、丁は乙と同様、點のみから判断しないで、鳥全體を眺めて、その距離を比較しようとするから、イ・ロの間隔をイ・ハの間隔よりも小さいと思ふのである。







中樞的錯覺の因由

えるなどは、装身の上に表れた實例である。又第二十一圖に示したものは、藝術に應用された末梢的錯覺の例である。

二、中樞的錯覺　これは、人によつて又時によつて同じくないけれども、總じて印象の不明瞭強い感情期待恐怖等がその原因の主なものである。例へば、耳の近くで唸る虫の聲を飛行機の音と思つたり、飛立つ水鳥の羽音を敵の來襲と感じたりするが如きは、それである。

幻覺主として内界の心意刺激による感覺を誤つて、實際或物體が存在してゐるやうに知覺するものを幻覺といふ。幻覺には聽覺に屬するものが最も多く、視覺に屬するものがこれに次ぐ。これ等は元來病的の現象で、疲勞や精神的苦悶の甚だしい時等に往々起る。かの精神病者熱病患者が屢、物の無いのに物を、見、音の無いのに音を聞くのはこれである。

錯覺と幻覺との結合

實際に於ては、錯覺と幻覺とは往々結合することがある。夕闇こ

幻覺の種類と因由

めた垣根の青瓢箪をお化と思つたり、夜風になびく枯尾花を白衣の幽霊と思つたりする等はその例で、鐵道の踏切に、闇夜に白く浮出たやうに立つてゐる注意標札を幽霊と思つた實例さへもある。この點から見れば、幻覺にも多少の感覺的誘發のあることが判る。

夢の起因

夢夢も亦錯覺又は幻覺に基づくものである。即ち睡眠中、外部或は内部の刺激に對して起つた錯覺或は幻覺に、種々の思想感情が結合したものである。例へば、手を胸に置いた時、猛獸に壓へられた夢を見、足を倒す時、絶壁から墜ちた夢を見、或は窓外の雨聲を聽いて、飛瀑に臨むと思ふ等は、何れも外部的の刺激から起つたものであるし、又試験を怖れてゐると、前夜に落第を夢みたり、父母を懷ふことの切な生徒が、父母との談話を夢みたりするのは、皆内部的の起因から生じたものである。又夢中更に動作を起すことがある。それを稱して夢遊といふ。

夢遊



## 第六章 觀念

### 第一節 觀念の意義

觀念 吾等は感覺的の刺激がなくても、他の代用刺激があれば、以前に經驗したことを思ひ浮べるものである。例へば、今、實物の小刀を見て、暫らくしてその小刀を他へ取去つてから、談話中に「小刀」といふ言葉を聞くとか、又は文字として「小刀」といふ語を讀めば、直前に見た小刀が腦裏に生き生きと浮かんでくる。かやうに思ひ出されたものを觀念又は心像といふ。

感覺と觀念との差異 原經驗たる感覺と、それを思ひ出した觀念とは、次の諸點に於て差異がある。〔一〕觀念は感覺よりも、性質の程度が弱い。眼前にゐない友人の顔を觀念に呼び起すことは出来るが、併し實際の顔に比べると明瞭でない。〔二〕觀念は輪廓的であつて細部に

心像

缺けてゐる。〔三〕觀念は實際の感覺に比べると、暫時的のものであつて、速く消え去る傾向がある。

### 第二節 觀念の把住と再生

把住と再生 吾等は、曾て見聞した景色や談話等を思ひ浮べる事が出来る。これ感官を通じて得た知覺が、その刺激の去つた後も神經中樞にその印象を留め、適當な事情の下には再現されるからである。かく印象を留めることを把住といひ、後に思ひ浮べることを再生又は憶起といふ。そして把住された觀念が再び思ひ浮ぶ時は、これを觀念の再生と呼ぶのである。

觀念再生の種類 觀念の再生には二つの種類がある。特に意を用ひて再生するのを有意再生といひ、努力をせずして自然と舊時の追想されるのを無意再生といふ。無意再生の中には、抑へようとして

把住

再生(憶起)

觀念の再生

有意再生

無意再生



も抑へ切れず、寧ろ強迫的に觀念が再生して來る場合もある。これは一種の病的情態で、精神病者又は強度の神經衰弱患者に屢々現れることである。

### 第三節 觀念の聯合

聯想  
觀念聯合の法則  
觀念は、決して孤立的に再生するものではない。現在思ひ出されてゐる觀念と最も深い關係をもつものだけが再生されるのであつて、これを觀念の聯合又は聯想といふ。この觀念の聯合には次の如き法則がある。

同時聯合  
繼續聯合  
一、接近律 同時に起つた觀念又は繼續して起つた觀念は、相互に連結して再生する。前者は同時聯合で、後者は繼續聯合である。閃電を見て雷鳴を思ふのは同時聯合であり、歌を誦ずるのに、上の句をいへば下の句が口を衝いて出るのは繼續聯合である。接近律による

聯合の中で最も重要なのは、言語と文字、及びこれ等と事物との結合である。

類似聯合  
反對聯合  
比喻の心理的意義  
二、類似律 内容の類似した觀念、又は性質が類似するが形式の相反する觀念は、亦互に聯合する。前者を類似聯合といひ、後者を反對聯合といふ。雪と白砂糖の如きは類似聯合で、白と黒の如きは反對聯合である。比喻は類似聯合の一つに外ならぬ。

觀念聯合の條件 或觀念に接近又は類似した觀念が多數ある場合に於ても、實際再生の際これと聯合されるものは、その中の一つに過ぎぬ。即ち結合の最も強いものが、それである。聯合を強くさせるに必要な條件は、次の如くである。

甲、客觀的條件  
一、刺激の強大 關係する刺激の強大なものは、その聯合が強固である。例へば、河池・瀑等についても、その最も大きなものが先づ聯

聯合を強くさせる條件



想されるのは、これである。

二、反復 共同活動を反復した度数の多いものは、聯合の力が強い。

「君子は義に喩り、小人は利に喩る。」のも、この理に外ならぬ。

三、聯合の先行 最初に聯合したものは、聯想し易い。「先入主となる。」

とは、これを言ふのである。

乙、主觀的條件

四、感情の強度 強く感情を刺激したものは、聯合し易い。最も樂し

かつた旅行、親近者との死別等が聯想し易いのは、これである。

五、利害關係 利害關係のあるものは、聯合し易い。何人も己が業務

に關係ある談話には直ぐ耳を傾けるのは、即ちそれである。

六、觀念相互の内部的關係 觀念相互の間に關係のあるものは、無いも

のよりも聯合し易い。唯羅列した單語よりも、意味をもつ文章

中の語句の方が想起し易いのは、その適例である。

第七章 記憶と想像

第一節 記憶

記憶の意義

現在の刺激が誘因イタリとなつて、或心意現象を生じ、それを

「過去に於て經驗したものである」と認める作用を記憶といふ。それ

故に、記憶は次の四過程を経るものである。〔一〕一定の印象を識得す

ること、即ち學習すること、〔二〕その印象が一定の時間把住されてゐる

こと、〔三〕その把住されてゐる觀念が何等かの刺激に誘發されて再生

すること、〔四〕その再生觀念を曾て經驗したものと同一である」と再認

すること、これである。

記憶の種類

記憶は、その方法の如何によつて次の三種に分れる。

一、機械的記憶

これは、接近律によつて、相繼續する事項をそのまま、記憶するのをいふ。吾等が反復によつて言語・文字・名稱等を暗記す

記憶の作用の四過程

記憶の三種別



感覺的記憶

るのが、それで、九々の如きは、その實例である。反復には、單に視覺聽覺の一又は二に訴へることもあり、更に筆寫談話等の運動感覺に併せ訴へることもある。何れにしても感覺に訴へるのであるから、感覺的記憶ともいふ。

二、論理的記憶　これは、記憶しようとする事項をその理由によつて結合し、且これを既有的の觀念と密接に聯絡させ、一つの系統を作つて記憶するのをいふ。即ち抽象的に行はれるものであるから、抽象的記憶ともいふ。例へば、物理、數學等の法則、地理に於ける氣候と產物との關係、歴史に於ける原因と結果との關係等は、皆これによつて記憶するもので、反復の度數は少なく、然も明確な記憶を得る長所がある。吾等の日常の記憶に於ても、これによる場合が最も多い。

三、人工的記憶　これは、人工的に偶然の關係を案出して、記憶しようとする事項を結び付ける方法である。數年代物名等を或符號に聯

抽象的記憶

記憶法

結する等がこれで、例へば、富士山の高さ三七七六・三メートルを「皆南無三」と覚え置くが如き類である。記憶法とは、人工的系統による記憶に外ならぬ。

記憶の個人差　吾等が記憶觀念を心に浮べる際、その主要素とするところに頗る著しい個人差がある。そして、その記憶觀念を構成する主要素が何れの感覺に屬するかに従つて、これを視覺型・聽覺型・運動型及び混合型に區別するのが普通である。又この中で聽覺型と運動型とは、結合して表れることが多いから、これを合一して聽覺運動型とすることもある。但し、この型的の區別は、練習によつて多少變化することもあるし、又その對象によつて幾分違ふこともある。

忘却　記憶の減少は即ち忘却の増加を意味する。總ての觀念を悉く把住することは、吾等の到底堪へ得ぬところであるから、心力の經濟上、比較的 unnecessary 事項はこれを忘却して、重要な事項の記憶を助

記憶の型的相違



時間の経過と暗記の忘却との割合

ける必要がある。従つて、重要な事項はその印象を深くして忘却を防がねばならぬ。けれども、總じて時の経過に伴つて、重要事項と否とを問はず、次第に忘却するものである。大體に於て、時間の経過が等比級數に近い割合で増して行くと、記憶に残つてゐるものは等差級數に近い割合で減じて行く。即ち、忘却は等差級數に近い割合で進んで行くと言はれる。故に、暗記をするには、一時に度々反復するよりも、暫らく時間を置いて反復する方が有效である。

### 第二節 想像

全體觀念と想像 吾等が或風景畫を描かうとして、これを意識に思ひ浮べる際には、單に過去に經驗した種々の風色景物を回想するばかりでなく、その中から必要なものを選択して、最も美しいと思ふ風景を構成する。即ち、先づ山水・風景に關する漠然たる觀念が浮ぶの

全體觀念

である。そして、その個々の要素は明かに意識されないが、その結合した全體が意識に浮んでゐる。これを全體觀念といふ。次には、この全體觀念の中から、個々の觀念、例へば山とか水とか家・橋・樹・舟とかの諸觀念が、それぞれ分解されて、順次に明かとなつて来る。かゝる分解を経ると、或部分觀念を中心として、新に又全體觀念が浮んで来る。即ち、各部分がそれぞれ明かに意識されて後、始めて全體の山水の光景が初よりも一層鮮やかに思ひ浮べられるのである。かくの如く、既有的觀念を分解し、それを材料として、まだ經驗しない新觀念を構成する働きを呼んで、これを想像といふのである。

想像と記憶 記憶觀念は、原經驗そのまゝの再生ではないが、併し大體に於ては原經驗の再生であつて、然もその特色として、親みの感情と再認の意識とを伴ふものである。然るに想像に至つては、原經驗そのまゝの結合でなく、その要素が有意的に新しい形に於て結合さ

想像と記憶の相違點



想像に於ける聯合の關係

れたものである。従つて想像觀念には、生新奇異の感情又は、新しいものを作つたといふ感じを伴つてゐるのが一般である。

想像と聯合 想像觀念の材料は聯合に基づくものであるが、最初の全體觀念が分解される際、その中に含まれてゐなかつたものが聯合によつて入つて來ることが屢ある。これは、藝術上の作品等で、長い年月を要して出來上つたものゝ場合には、著しく現れることである。多くの星霜を経て成つた文藝品や著作物で、首尾の一貫してゐないものゝあるのはこの理で、當初定められた大體の意匠即ち全體觀念に従つて筆を進めてゐる中に、面白い思想が浮んで來ることもあれば、又意匠中にあつた部分が面白くなつて來ることもある。そして前者が採用され、後者が削除された結果、かうしたものとなつたのである。

程度の上から見た想像の二種

想像の種類 想像の働きは皆有意的であるが、その程度によつてこ

れに段階をつけると、受動想像と發動想像との二種となる。

一、受動想像 これは、浮んで來る觀念を自然のまゝに任かせてゐる場合であつて、例へば、修學旅行の前夜、明日の旅行地の光景をまざまざと思ひ浮べてゐるが如きは、それである。

二、發動想像 これは、一定の目的、企畫に従つて諸の觀念を結合して想像觀念を構成する場合であつて、談話をし、文章を綴り、藝術上、科學上の仕事をなすが如きは、多くこの想像による。

内容と事實との關係から見た想像の三種

空想

妄想

空想 理想の別がある。發動想像の程度が餘りに高く、事實と懸け離れてゐるものを空想といふ。兒童及び青年には空想が多い。これ經驗に乏しく、且事實によつて想像を修正することが少ないためであるが、彼等の知識が進んで來ると、それが次第に實際に近づくものである。妄想とは、この空想が尙もその翼を擴げたもので、多くの



理想

矛盾を含み、従つて不合理な想像である。これは精神病者等に著しく現れる。理想とは、想像によつて描かれた圓滿完全な目的である。その特色、即ち理想が空想、妄想と異なる點は、それが現實と懸け離れず、且それに伴ふ眞摯な態度をもつことである。

想像の價値

想像の價値及び弱點、事物の理會には、想像の力が要る。所謂一を聞いて十を知る。のも想像の働きに外ならぬ。記憶が過去を與へるに反して、想像は未來を與へる。人はこれによつて、現在を超越して痛苦を減じ、理想を憧憬して進歩を求め、又これあるがために、よく他人に同情することも出來れば、事業に熱中することも出来る。總じて學術、技藝の研究、殖産、興業の計畫は勿論、これを小にしては日常の生活から、これを大にしては社會の發展に至るまで、吾等は想像の恩恵に浴することが甚だ多い。けれども、想像が意識の統一を失ふと、常軌を逸して妄想に陥り、實行の手段を缺いた空想を抱き、或は邪推を

想像の弱點

逞うし、或は虚偽を語る等の弊に陥る虞もある。

想像と遊戯

兒童の遊戯には、想像の要素をもつてゐる場合が多い。兒童は與へられた材料で、遊ぶに都合のよいやうに新しい遊戯を構成することがある。又一定の遊戯をしてゐる際でも、その情態の變化する毎に、新しい情態に自らを適應するやう努める傾きがある。かくの如く、兒童は想像作用を加へて遊戯をするものである。幼兒の遊戯心を刺激するものは玩具であるが、玩具は兒童が持つて遊ぶもので、その想像活動の材料である。種々の玩具によつて、兒童が工夫考案し、或は改作して興味ある結果を造り出すことは、やがて彼等を發明・創作の能動的活動に導くものである。

藝術の鑑賞

藝術を鑑賞し又これを創作するにも、想像を必要とする。藝術品を鑑賞することは、藝術家の示せる材料を一の玩具として、想像の遊戯即ち自由に想像を働かすことである。よい小説には

玩具



概ね讀者が自分と同一視し得るやうな主人公がある。その主人公が、話の進むにつれて、段々出世するとか、立派な仕事を爲し遂げるとかすれば、讀者はこれを自分と同格視して、暫時の間、楽しい想像の世界を彷徨して現實の悩みを忘れる。

### 第八章 思考

#### 第一節 思考の意義

形式上思考の三區別

思考とは何か 知覺や觀念は個々の事物を對象とする働きであるから、更に進んで事物間の關係を定める作用が起らねばならぬ。これを思考といふ。この働きによつて吾等は、經驗した個々の事物をその關係に基づいて統一し、知識を經驗以上に進めて深遠な研究をすることが出来る。そして個々の事物はその材料で、それ等の關係の定め方はその形式である。思考をその形式に従つて區別すると、

概念判斷推理の三つとなる。

#### 第二節 概念

觀念と概念

概念の意義 無數の事物の心像を個々別々に腦裡に貯へることは、人間能力の許さぬところである。そこで、及ぶ限りこれを整理して、系統的に排列する必要がある。例へば、黒馬・白馬・日本馬・アラビヤ馬等、各種の馬に共通な點のみをとり來つて、單に馬なる觀念とし、更に馬・牛・犬等に共通な點をとつて、哺乳動物なる觀念とすることが出来る。かく或關係をもつ事物間の通有性を綜合して得た抽象的の觀念を概念といふ。

心理的概念

概念の種類 概念に心理的概念と論理的 concept との區別がある。直觀の反復に伴ひ、無意識に事物の共通點を綜合して構成された概念を心理的概念といふ。これは、通有性が遺漏なく綜合されたとはい



論理的  
概念

へぬから、概念として猶不完全なるを免れない。兒童の概念は多くこれに屬し、成人の概念も、日常卑近の事物についてはこの類のものが多い。更に通有性が遺漏なく綜合されたものを論理的概念といひ、論理的概念を構成することは科學の任務である。

### 第三節 判斷

屬性

判斷の意義 概念とその屬性との關係を確定して、一つの意味を表すことを判斷といふ。屬性とは、その概念を構成する要素である。例へば、「この花は赤い」といへば、それは一つの判斷で、「この花」といふ概念と「赤い」といふ屬性との關係を確定したものであり、又「犬は獸である」といへば、これも一つの判斷で、「獸なる概念」とその屬性たる「犬」との一致を確證したものである。

判斷と知的作用 知覺の如きも、その根柢に於ては判斷作用が働い

て居り、又記憶に於ける再認や、想像に於ける抽象構成にあつても、判斷作用が行はれて、それが出来る。従つて概念の如きも、その通有性を抽象するのは、多數の意味を聯合することによるのであるから、やはり判斷作用があつて始めて起るものである。さうして見ると、判斷はあらゆる知的作用の原動力ともいつてよい。

### 第四節 推理

推理の意義 吾等が稍複雑な問題に出あつた時には、一つの判斷だけではその解決がつかぬ。既知の判斷を基礎として新たな判斷を作らねばならぬ。又場合によつては、昨夜大雨が降つた。こんなに川に水が出てゐるから」の如く、既知の知識の確實性を證明する必要もある。かくの如く、判斷を材料としてこれを吟味し、その關係から新しい判斷を導き出すことを推理といふ。推理は實に思考の最高作用



直接推理

間接推理

演繹推理

類比推理

歸納推理

である。

推理の種類 推理は、直接推理と間接推理とに大別される。直接推理とは、例へば、馬は動物である。から或動物は馬である。とする如く、一つの判断から直ぐ他の判断に進むものであり、間接推理とは、二つ以上の判断を基礎とし、その関係から新しい判断を導き出すものである。就中、一般の原理から特殊の場合を推定するもの、例へば、教生は師範生である。某君は教生である。故に某君は師範生である。の如きを演繹推理といひ、特殊の場合から他の特殊の場合を推定するもの、例へば、昨日は雨が降つた。今日は空模様も風向も温度も昨日と似てゐる。故に今日も恐らく雨が降るであらう。の如きを類比推理と名づけ、更に特殊の場合から一般の原理を推定するもの、例へば、金・銀・銅・鐵・鉛等は熱によつて膨脹する。金・銀・銅・鐵・鉛等は金屬である。故に總ての金屬は熱によつて膨脹する。の如きを歸納推理と稱する。

### 第五節 思考と言語

言語の意義 言語は思考の符號である。個々の語が概念の代理であるのは言ふまでもなく、判断も推理も語の連続によつて言表されるのは、前數節に擧げた多くの引例からでも判るであらう。尤もこれらは發達した思考であるが、原始的の思考作用は、吾等が直接にこれを知ることが出来ぬけれども、身振語及び未開人の言語によつて、間接にこれを察することが出来るのである。

身振語 身振語は、主として未開人と聾啞者とに於て見られるもので、これに、手の指でその事物をさし示す指示身振と、指や手で事物の像を空中に描く表現身振とがある。これ等の身振語は、總て直觀に訴へて直ぐ理會の出来る性質をもつてゐて、抽象的概念を示さないのが、その特徴である。

指示身振と表現身振



未開人の言語 文明語で「王の家」といふのが、原始的言語では「王―所  
 有―家」の形となり、又文明語で「西」に相當する表出は「日―坐―所」とな  
 る。かくの如く、原始人の言語は、身振語と同じく直觀的で、その文章  
 の構造を見ても亦直觀的である。例へば、短氣な教師が兒童を打つ。  
 といふ意味をば、未開人は、人―學校―短氣―行―打―兒童の順序で  
 發表する。幼兒の言語も亦これらに類似するところがある。

### 第三篇 感情

#### 第一章 感情の概説

感情の意義 吾等は、刺激を唯その在るがまゝに受けるだけでなく、  
 同時にこれに對して快又は不快を感じる。この働きを感情といふ。  
 例へば、楚々たる海棠の花を見て、その色、その形を辨別すると共に、美  
 しい、愛らしい」と感ずるが如きは、即ち感情である。

#### 第二章 簡單感情

簡單感情の意義 感情は單獨には起らずに、必ず刺激に伴ふもので  
 ある。美しい色を見れば快を感じ、苦味を嘗めると不快を感じる。  
 かく感覺に伴つて起る感情を簡單感情又は感應といふ。

感應



簡單感情と感覺との差異 簡單感情は、次の諸點で感覺と違つてゐる。  
 一、感覺は容易く心意を集中して觀察し得るが、感情は注意して觀察しようとするれば、漠然たるものとなり、感情としての性質を失つて來る。

二、感覺は局所づけられてゐる。即ち光は眼で見、味は舌で味ふといふやうに、何處で感覺が起るかを知ることが出来る。然るに快及び不快は、定まつた局所で感ぜられるのではない。

三、感情は感ずるための一定の器官をもつてゐないといふ點で、感覺と違ふ。例へば、温さ寒さに對しては特別の感覺器官があるが、快を掌る器官、不快を掌る器官といふやうなものはない。

感情の三方向 感情には三つの方向がある。一は快と不快で、これは更めて説明するまでもない。二は興奮と沈靜で、例へば、赤色は吾等の心を引立たせるやうな氣分を起させ、青色はこれに反して落着

快と不快  
 興奮と沈靜

緊張と弛緩

かせるやうな氣持を與へる。前者は興奮の感情で、後者は沈靜の感情である。三は緊張と弛緩で、例へば、或刺激が來るか來るか豫期してゐる場合には、張りつめた感じが起り、その豫期した刺激が現れると、直ぐ弛んだ氣持を生ずる。前者は緊張の感情で、後者は弛緩の感情である。そして、これら感情の三方向は互に密接な關係をもつてゐる。

簡單感情の種別 簡單感情は、有機感覺に伴ふ一般感應と特殊感覺に伴ふ特殊感應とに分れる。一般感應とは即ち氣分で、氣分が吾等の生活に重大な關係をもつことは、前に述べた通りである。特殊感應の中、味覺・嗅覺に伴ふものは、生命保全の上に必要であるから、早くから發達し、皮膚覺運動感覺に伴ふものは、それぞれに皮膚を保護し、運動の休息を促す。聽覺・視覺に伴ふものに至つては、最も高尚なものとしてゐる。



第二十二圖  
の說明  
右、甜味  
中、酸味  
左、苦味

第二十二圖  
味覺に伴ふ簡單感情の表出



簡單感情の表出 感情は、身體上に種々の變化を及ぼすものである。簡單感情の表出は、顔面に於ける外は、さまで明かでないやうであるが、これを實驗して見ると、脈搏、呼吸等に強弱、遲速等の影響を及ぼすことが判る。即ち快の時は、脈搏が強く、遅く、呼吸が速くて弱く、又不快の時は、これに反する。この外、簡單感情の變化は、胃腸等内臓の働きや體內諸腺の内分泌にも亦、影響を及ぼすものである。

第三章 情緒

情緒の意義 喜び、悲しみ、怖れ、怒り、樂しみ、憎み等は、情緒を言表す語として用ひられる。これ等の語で言表される心身の情態は、攪亂されてある情態である。若しこれを外部的に觀察すれば、怒りの際に拳を握り、顔を赤くし、呼吸が激しくなり、筋肉が緊張し、聲が大きくなるやうに、著しい身體的變化のあるものである。

情緒でない攪亂情態 情緒は上述の如く、心身が攪亂された情態である。然るに疲勞及び飢渴の如きは、よくこれに似てあるけれども情緒ではない。疲勞は筋肉による感覺の複合情態で、飢渴は有機感覺の一種である。疲勞及び飢渴は、次の二點で情緒と違ふ。

- 一、一は局所が明かであるが、他はそれが明かでない。飢は胃で感じ、渴は咽頭で感じ、筋肉疲勞は筋肉で感ずる。然るに情緒は、吾等の内部で感ずるのであつて、その局所が一定してゐない。
- 二、一は刺激が内部的であるが、他は外部的である。飢渴及び疲勞

疲勞飢渴との相違點



情緒の時間的經過

は、内的の身體情態から自ら生ずる結果である。これに反して情緒を起す原因は、外的のものである。人に辱しめられたから憤怒の情態になり、その情態を自體内部で感ずるのである。即ち情緒情態は腦髓から起るが、腦髓の活動は外的の刺激によつて起されるのである。

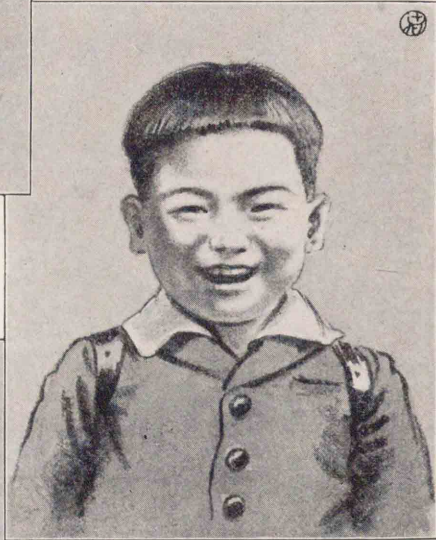
情緒の特徴 情緒には左の三つの特徴がある。

一、情緒は時間的經過を取るものであるが、その經過の情態は刻々に變るものである。そしてその推移には、一般に三つの時期を劃することが出来る。最初は、その起された觀念によつて、特有な感情の發する時期で、その強弱は、例へば憤怒の如きは強く、心配の如きは弱い。次には、その觀念に聯想される種々の觀念に伴ふ感情の起る時期があり、終には、かゝる觀念が次第に消え失せて、感情も亦漸次に薄らぐ時期が来る。例を挙げると、友人の計

第三十二圖  
情緒の表出のそ



みかには



ひらわ



きな



圖三十二第  
二のそ 出表の緒情



きろどおい輕



りかいい激



れそお

情緒が心意に及ぼす影響

情緒の生理的表出

表情

を聞いて、悲しみの情が先づ起り、種々の思出に伴ふ情が相尋いで生じ、遂にはそれ等も亦自ら消え行くが如き、これである。

二、情緒の次の特徴は、それが心意に及ぼす強い影響である。即ち、情緒は觀念の進行を或は促進し或は抑制するもので、例へば、喜悅の時は考が進み、悲哀の時は言はんと欲しても容易に言ひ得ざるが如き、これである。

三、情緒は簡單感情に比して、その全身に於ける生理的隨伴現象が著しい。そしてそれ等は、第一に感情の強さを示し、第二にその性質を表し、第三に表情・身振の如きは、感情に伴ふ觀念を表出しようとする。これ等は、常に混合して表れるもので、表情とはこれである。

情緒の表出 情緒の身體的表出は頗る顯著なものである。今その主な點を列擧すると、左の如くである。



情緒の身體的表出

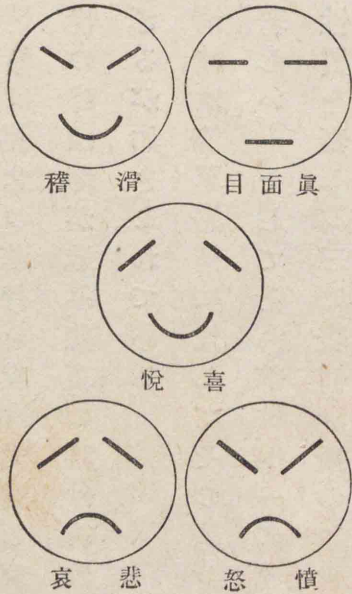
一、脈搏・呼吸　これ等は、簡單感情の場合に比して一層著しく變化する。

二、分泌機關・内臟機關及び不隨意筋　悲哀には涙が出で、甚だしい恐怖には皮膚が蒼白となり、唾液の分泌が止まり、身體が震へる。

憤怒には、心臓の鼓動が高まる。

三、四肢　憤怒には拳を握り、腕を扼し、恐怖には瘧癎を起し、歡喜には躍動する。

圖四十二第  
式模の情表面顔



四、顔面　特に目及び口に於て著しい。顔面の表出を見て、ほゞその情緒の如何を察知することの出来るのも、これである。情緒の表出は神経系統に變化を與へ、次いで情緒傾向を強からせ

るもので、表情と情緒とは密接不離の關係をもつてゐる。従つて、情緒的表出運動を摸すると、自然にその情緒の發生を助けることが多い。儀式作法等が人の感情を一層強めるのも、それである。これに反して、情緒の表出運動を制御すると、情緒はいつしか平靜に歸することもある。所謂喜怒哀色に表れざること、修養によつて達せられるわけである。

### 第四章 情 操

情操の意義　情操とは、高等な知的活動に伴ふ複雑な感情情態である。併し一面から見れば、情緒が知的作用によつて醇化されて、一種高尚な感情となつたものといつてよい。但し情緒では、それが感覺的刺激に即して直に生ずるのであるから、天賦的であるが、情操では、その生起が有意的で判断の形を通して表れる。そして、情操は情緒

情操と情緒との異同



に比して、著しく永續的であり、且一層緩徐なのが常である。  
情操の種類 情操は、その対象の如何によつて、知的情操、美的情操、道徳的情操、宗教的情操に大別される。

一、知的情操 これは、思考、理會等の知的活動に伴ふ情操で、例へば、新奇な事物に接してそれを知らうとする時、又はそれを知り得た時は、これは眞理であるとの感情に伴つて快を覚え、その解決を見ることの出来なかつた時は、矛盾の感に伴つて不快を感ずるが如き、これである。そして、そのまだ經驗せぬものに接した刹那には驚愕を感じ、初は恐怖と混同して現れることが多い。次いで怪訝となり、更に疑問となつて、知的活動を促進し、これを解決せねば止まぬ。その激しいものにあつては、往々身命をも賭するに至る。とにかく、この情操は眞理探究の先驅ともいふべく、世の發明、發見は勿論、學理の建設構成も、多くは熱心な求知的努力の賜である。

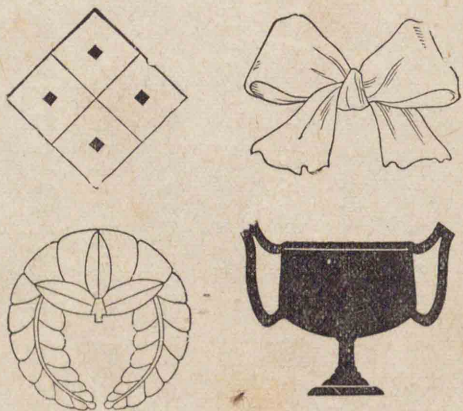
驚愕  
怪訝

美の要素

材料と形式

觀念想像の共働作用

圖五十二第 例賞の齊均右左



二、美的情操 これは、美醜の判斷に伴ふ情操で、従つて、その判斷の標準たる趣味、知力の如何によつて、人毎に程度が違ふ。總じて美は次の二要素から成立つ。

イ、客觀的要素 これを分つて更に材料、形式の二つとする。材料とは、色彩、音聲、形體等をいひ、形式とは、左右の均齊、各部の長短、大小の比例、全體としての調和、調和を害せざる變化、變化の中の統一等である。

圖六十二第 割分金黃



ロ、主觀的要素 これは、対象によつて喚び起される觀念又は想像等の共働作用をいふ。例へば、藝術的作品に對す



美的情操の種別

る吾等の美感の滾々として盡きぬのは、この共働作用に基づくもので、美的情操が、他の情操に比して多く主觀的なのも、畢竟そのためである。

美的情操は通常次の四種に分けられる。

イ、優美 これは純粹美で、單に美といふ時は概ねこれを意味する。

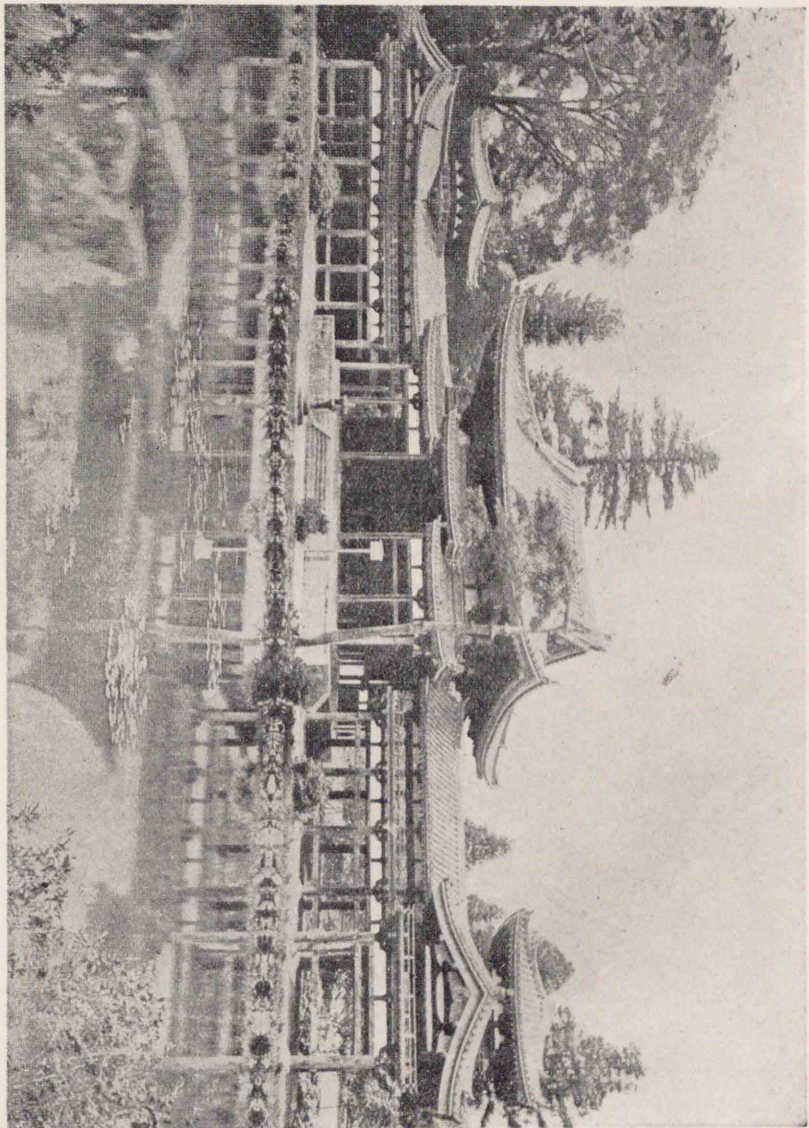
ロ、壯美 これは、偉大強力等に對する美感である。例へば、大波の當つて碎ける絶壁に臨み、紺碧の空に突立つ白雪の峰を仰ぎ、或は勇士烈婦の物語を聽く等の際に生ずるものが、これである。壯美は、人の元氣を振作するに有效なもので、性格鍛鍊上に重要な關係をもつ。

ハ、滑稽美 これは、事物の關係が、不快を感じぬ程度に於て、不釣合な場合に感ずる一種の感情である。大人の帽子を被つた子供を見た時の快感の如きは、その一例で、滑稽文學は、これをその基調とするものである。



師大形童圖七十二第





堂風風院等平 圖八十二第

二、悲哀美 これは、悲哀な事物に接して同情を起す場合に生ずる情操である。悲劇を観て、悲哀の情に堪へず、涙を拂ひながらも猶それに引込まれるのは、これによる。但し、自ら悲哀を體驗する場合には、悲哀美は生じない。

三、道徳的情操 善い事をした時には、言ふに言はれぬ愉悅を覺え、悪い事をした時には、濃霧に閉ぢこめられたやうな不安を感じる。これは、自己の行爲についてだけでなく、他人の行爲についても、それぞれに快・不快の情を惹く。かく自他の道徳行爲に對して起るものを道徳的情操といふ。この情操は、良心作用の一部で、良心とは、吾等の全心意が道徳的方面に向つた場合の名である。そして、一定の標準によつて行爲の善惡を判定するのは、良心の知的作用であり、善に對する意向、惡に對する抑制は、その意的作用であるが、更に義務の感及びこれが實行に伴ふ賞讃・悔恨の念に至つては、良心の情的作用であ

良心の心理的説明



る。それ故に良心は、一面、天賦的であると共に、他面、生後の經驗教養によつて漸次に發展するものである。

四、宗教的情操　これは、超人間的なものに歸依して、これを憧憬する情操である。その対象は、或は神といひ或は佛と稱し、宗教によつて違ふけれども、とにかく、我が身の貧弱さと運命の果敢なさとを悟つて、圓滿完全な理想を渴仰し、その加護に頼つて祈願を成就し、慰藉を求めて煩悶をやり、そして安心立命を得るのは、この情操の働きである。

## 第四篇 意志

### 第一章 意志の概説

意志とは何か　吾等は、刺激を感受してそれを認識し、又これに伴ふ主觀的感情をもつただけでなく、それに應じて自ら發動的に行動しようとする働きをもつてゐる。これを廣義で意志發動といふ。意志發動は、生後間もない乳兒の盲目的運動に始まり、知識、感情と交錯して發達し、遂に人類最高の心意生活たる思慮的行爲に達するものである。この意志發動は二様に表れる。一は或目的を以て運動を行ひ、又は制止する外的活動で、二は感情を抑へ注意を集める内的活動である。就中先づ表れるものは外的活動で、殊に初期に於ては無意的運動が最も多い。故に意志の作用を研究するには、この無意的

意志發動

外的活動

内的活動



運動から有意的運動に移る心的階段の敘述から出發する。

## 第二章 運動

運動の種類 生物は、外界から刺激を受けると、それに應じて運動を起して外界に順應するものである。今その運動を、心意の管理を要する有無多少によつて分けると、次の如くなる。

一、反射運動 瞳孔の伸縮、瞬き、發汗、欠伸、噴嚏などがそれで、感覺的刺激に對して直に起る簡単な無意識運動である。

二、本能運動 吸乳、啼泣、争闘、羞恥の如き、又動物の築巢、産卵、移住、冬眠の如きは皆これで、複雑な運動ではあるが、その起因は天賦的のもので、有意的の行動ではない。有意的でないといつても、その運動中に、運動そのものが快であるとの意識を伴ふのが普通である。

三、有意運動 これは、特に意志を用ひてなす選擇的運動である。例

へば、幼児が餓ゑた時、食物の良否を質さず、直にこれを口にするのは、本能運動であるが、漸く長ずると、その良否を確めて、これを食したり、捨てたりするのは即ち有意運動である。

四、自動運動 上述の有意運動が屢、反復されると、遂に無意識的の運動となるので、これを稱して自動運動といふ。もの言ふこと、歩くこと等の複雑な習慣的運動は、大抵これに屬する。

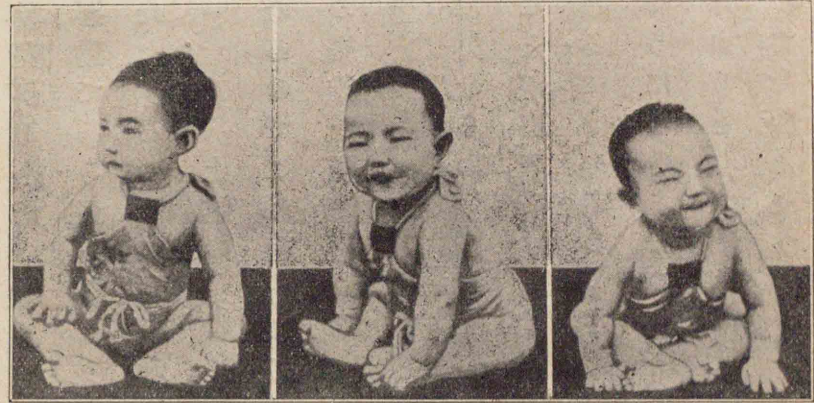
運動習得の順序 總じて運動は、吾等が外界に順應するための發動作用に外ならぬ。吾等は、生れながらにして反射本能等の諸運動を營むことが出来るけれども、併し有意的に自己の運動を管理するやうになるには、一定の順序を経なければならぬ。例へば、嬰兒が直立するやうになるまでの徑路を見るに、始は僅に物に手を添へて半身を擡げようとして、種々の亂射的運動を試み、屢、錯誤を重ねて漸く物によつて身體を支へ得るに至る。それでも猶獨りで立つまでには、

直立に於ける運動習得の順序

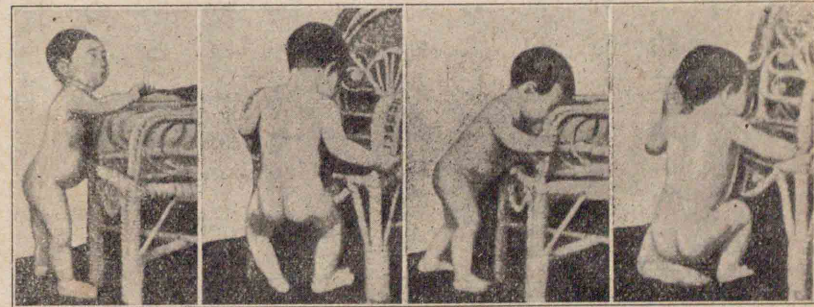


第二十九圖の說明  
 右、手をつきながら坐る  
 中、手を離さずして坐る  
 左、手を離して坐る  
 第三十圖の說明  
 一、立ちをあまり試みる  
 二、立ちがあまり出ると立ちがあまり出ない  
 三、立ちがあまり出ると立ちがあまり出ない  
 四、立ちがあまり出ると立ちがあまり出ない  
 兩圖は、高島教授による

第二十圖 嬰兒が坐るまゝで



第三十圖 嬰兒が立つまゝで



幾多の失敗を免れない。そして、既にそれに成功すれば、次回からは、次第にその練習中に於て諸種の不用運動を排除し、遂には容易に直立することが出来る。

試行錯誤法（試錯法）

衝動

るやうになる。直立から歩行に至る順序も亦ほゞこれに類する。かゝる徑路を呼んで試行錯誤法といひ、或は略してこれを試錯法とも稱する。吾等は、この試行錯誤法によつて自己を管理し、そして外界に順應するものである。

第三章 衝動と本能

第一節 兩者の關係

衝動と本能との意義 乳兒は、乳を飲むことを學びもしないし、又乳の效用をも知らず、従つて吸乳の結局の目的をもつてゐないわけであるが、然も生後間もなく巧みに乳房を吸ふ。飢えた乳兒にとつては、乳房を吸ふことそれ自身が目的であつて、何等他の目的のための手段ではない。かゝる内的傾向を衝動といふ。一定の感覺的刺戟に對して何等學習することなしに、かやうに一定の衝動的反應が起



本能

り、これを種族に固有な一定の形式で處理する時、その處理の行動を本能といふ。即ち本能とは、一つの衝動を處理するために、遺傳的に備はつてゐる行動組織をいふのである。

兩者相違の四點

衝動と本能との異同衝動と本能とは、最初無意識の中に、然も一定の目的をもつた人間の本性として現れて來るものである。そして兩者は、或場合には共に意識されるもので、この點で兩者は同一である。併し兩者には、次の如き根本的な相違がある。〔一〕衝動は意識によつて妨げられることなく、永く衝動として保持されるのに反し、本能は或事情の下には、意識によつて妨げられ、抑制されること。〔二〕衝動を拒否し促進させ得るものは意志であるが、本能の推移に影響を與へるものは意志ではなくて、知性であること。〔三〕衝動は自己以外の何物かに向けられた現象であるが、本能はそれ自身完結された現象であること。〔四〕従つて、衝動には變容の可能性がかなり多いが、本能は多く固

定的なものであること、これである。

### 第二節 本能の特質と種類

反射運動と本能運動との區別

反射運動と本能運動これ等の二つは、區別し難い場合が多いが、代表的の反射と代表的の本能との間には、次の如き若干の差異がある。〔一〕兩運動共に天賦的反應であるけれども、反射はその形式が簡單であるが、本能は鳥の巢を營む運動の如く、複雑な系統的運動である。〔二〕反射は始は無意識的で、運動後になつて意識されるのに反し、本能は意識的に行はれる。〔三〕反射はその刺激が起ると同時に起り、そして直ぐ終るものであるが、本能は刺激によつて起つた傾向が永續するものである。

本能の種類 人間の本能は、〔一〕食事の運動や危害を避ける運動等の如く、身體的の必要に應ずる本能。〔二〕群居本能・母性本性等の如く、他人



に對する本能、<sup>三</sup>好奇心競争等の如き遊戯的の本能の三種に大別することが出来る。

一、身體的の必要に應ずる本能 水分が缺乏する時は、水を飲むための運動を起し、飢ゑる時は、或は乳を吸ひ、或は食物を求める。食物をあさる本能と相竝んで、空氣をあさる本能をももつてゐる。若し何等かの事情で呼吸が困難になつたとすれば、窒息の感が起つて、狂氣の如くにそれから逃れようとするものである。又吾等は、抓つたり刺したりされると、その危害から逃れる運動をする。これ等は本能で天賦的のものであるが、併し何を飲むか、何を食するか、何を恐れるかは、これを學習するのである。

二、他人に對する本能 人間は群居を好むもので、唯一人で居るのは淋しく、仲間があれば満足してゐる。我等の社會的行動は、この群居本能を基礎として、後天的の學習によつて出来上つたものである。又

子供を育て、保護する母性本能がある。母性本能を起す刺激となるものは、獨立の出来ぬ嬰兒であるが、又嬰兒の如くに猶可憐であつて獨立が出来ぬ時には、年長の兒童や老人も、同種の保護的行動を起させる對象となる。

三、遊戯本能 よく休息した嬰兒に於ては、何等の目的もなしに、蹴つたり手を伸したりして、自分で満足してゐるのを見ることがある。かゝる運動は、身體情態が健全である時に起るもので、疲労すると生じない。かゝる氣まぐれの運動から漸次發達して、歩行發音の如き運動が現れ、やがては、外物を弄んだり穿鑿したりするやうになる。

#### 第四章 執意

執意の意義 執意は狹義の意志で、決意の意識がこれに伴つてゐるのが特色である。通例、單に意志といふ時は、多くはこれを指す。目



前の慾望に動かされてする行爲は、衝動動作で、十分な意志的行爲でない。十分な意志的行爲とは、思慮、選擇等の働きがそれに加はり、複雑な過程を経て始めて成立つものである。

意志作用の過程 次に意志作用の過程を説明しよう。

一、動機 意志的行爲の原因たるものを動機といふ。動機の中に含まれる目的觀念は意志の向ふところを示し、これに伴ふ感情は意志を動かして前進させようとする。けれども、衝動動作以外の場合には、二個以上の動機が同時に現れて、互にその勢力を争ふものである。

二、思慮 そこで、個々の動機について、その場合に於ける價值と、それが果して實現され得べきや否やとを考慮する。

三、選擇 かくして各種の動機を比較し、最も適當と認める動機を選択する。

四、決定 選擇したものを愈々實現しようと決定する。そして直に實

現されないで、猶多少この情態の持續される場合を決意といふ。意志の發達 人の幼時にあつては、その行爲は概ね衝動的であるが、知的作用の増進に伴つて漸次に選擇を生じ、かくて簡単な意志動作から複雑なそれへと次第に發達する。然るに複雑な選擇に於て同一の動機の選擇を反復すれば、そこに自ら一定の方向を生じ、常に抑壓される動機は、次第に意識に現れぬやうになり、遂には衝動的となつて、觀念さへ浮べば、直に行爲に現れるやうになる。さうなると、意志は又、他の衝動的なものに漸次思慮を加へて行爲し、そしてこれを反復する時は、それが又、遂に簡単な衝動的のものとなる。

意志の強弱 強固な意志とは、目的觀念を固執して行動することを意味する。そして、これがためには、動機の決定に際してその目的觀念の明瞭なこと、同時に、又強烈で永續する感情がそれに伴ふこと

強固な意志



信念

を要する。實際生活に於て、知識的にその向ふところは定まつても、深く感動するのでなければ實行に移り難いのは、吾等の屢、經驗することである。これ信念の大切な所以であつて、信念とは、確實な知と強盛な情との十分な結合に外ならぬ。但し、これ等の心意作用も、身體と切つても切れぬ關係のあるのは無論である。

### 第五章 習慣

習慣の意義 同一の行動を屢、繰返す時は、生理的には神經傳達の通路が容易となる。これは、神經末端の接觸部の聯絡が段々固定されると、遂に一定の型にはまつた傾向を獲るに至るからである。意志作用に於ても、衝動動作から漸次發達して、選擇意志動作となり、更に衝動動作が無意識的、機械的、反射的に行はれるやうにもなる。即ち熟練のために心力の經濟を來すのである。かゝる情態を習慣とい

習慣と學習

ふ。

習慣の形成 習慣は吾等の生活に於て、極めて重大な役割を演ずる。従つて、習慣の形成は極めて大切なことである。學習の作用の如きも、一般に習慣と密接な關係をもつてゐる。學習に於て、無意注意は有意注意に、更に第二次無意注意に進められねばならぬ。心的要素の相關結合についても亦、受動的聯合から能動的聯合に進ませ、更に練習によつて、知識や技能が第二次聯合的に働くやうにしなければならぬ。

人生に於ける習慣の重要性

習慣と人生 總じて習慣は行動を迅速的確ならせ、疲勞と努力とを輕減するものであるから、心身の活動を向上させて、次第に新天地の開拓に向はせる。これ即ち、人生に於ける進歩發展の道程に外ならぬ。或學者が「人間は習慣の束である」と言つてゐるが、これは人の日常生活が如何に多く習慣的動作によつて支配されてゐるかを語る



ものである。習慣は實に、教育のためにも又修養のためにも、極めて必要なことである。

## 第六章 性格と氣質

性格の意義 或瞬時に於ける吾等の心意を觀察すると、種々な觀念や感情や欲望等が相關的に結合してゐるが、單に結合してゐるだけでなく、その中の何れか、優勢な傾向となつて諸他の傾向を統御し、全體を統一脈絡ある組織たらせてゐる。然のみならず、この統一脈絡は瞬間的のものでなくて、前後にも亘つて行はれ、優勢な傾向が過去、現在、將來を貫いて、心中に現れる諸情態を統率するやうになつてゐる。尤も、この組織の中に優勢を占めてゐる觀念や感情や欲望は、時に變ることもあるが、その心意の奥底に存する根本傾向を代表して、統率の任に當つてゐるものは、さまざま變化しない。かくの如く、優

勢傾向によつて持續的に結合してゐる心意の一般情態を性格といふ。

性格の成立 性格は、かくの如く種々の心意傾向及び心意情態が結合して生じた機能的の統一であつて、同一の意志行爲が反復されて習慣が確立し、意志の方向が或程度まで固定して、第二の天性となつたものである。或立場からいへば、人は生れてから死ぬるまで、毎日性格を形成してゐると言つてよい。そして良い性格を育成するところが教育の仕事であるから、それには人生の理想を生活の規範とし、この規範をよく自覺し、これによつて意志の動機を自ら選擇するやうに努めねばならぬ。性格は知識・經驗の進歩と共に多少の移動を免れぬけれども、人の習慣は大抵成年前後に於て殆ど固定するものであるから、性格も亦、その頃に至つて確立するものと見てよい。

性格の種類 意志作用は頗る複雑なものであるから、人の性格を截



性格學

然と區別することは極めて困難である。試みに形式的方面から見ると、確實な鞏固な性格と、薄弱で動搖し易い性格とに分れるし、又これを内容的方面から眺めると、優良な性格と、劣悪な性格とに分れる。更にその根本的傾向の種別、又はその規範として選擇する理想の種別によつて、道徳的性格、宗教的性格、合理的性格、藝術的性格等に區別することも出来る。近時發達して來た性格學は、これ等の問題を詳しく研究してゐる。

氣質の意義 尙こゝに述べて置くべきは氣質である。氣質とは情緒を中心とする吾等の素質であつて、古來これについては色々の説があるが、今日では、人の先天的生理情態に基づくものと解され、刺激に對する情意の反應によつて、次の如くに説明されてゐる。

一、多血質 俗に陽氣の質といふ。興奮が速くて弱い。何事にも感動し易く、舉動は輕快であるが、一時的で忍耐力に乏しい。

多血質の特徴

神經質の特徴

二、神經質 俗に陰氣の質といふ。興奮が遅くて強い。容易に感じないが、一旦感ずると印象は深い。思考力に富み、概して憂鬱に傾き易い。

膽汁質の特徴

三、膽汁質 俗にいふ短氣の質である。興奮が速くて強い。感じ易くて、然も把住は確實である。一般に勇敢着實であつて稍憤怒し易い。

粘液質の特徴

四、粘液質 俗にいふ平氣の質である。興奮は遅くて弱い。事物のために動かされ難いけれども強硬でない。總じて感情に激ずることが稀である。

血液型

元來、人は各氣質を併有するものであるが、その分量の多少によつて、かく大別するだけである。又、氣質は年齢により性別によつて、一方に傾き易く、國民によつても特殊の傾向を有するところがある。この外、近時、血液型によつて人の性質を別ける説もある。



## 第七章 個性

個性の意義 吾等は、體格容貌に於て千差萬別であるやうに、性格能力に於ても種々の點で相異なつてゐる。例へば、知能の働きでも、感情の現れ方でも、行爲の仕方でも、人々各、特異な性質をもつて居り、常にそこに個人差が見られる。然もこの個人差は、同一人に關する限り、ほゞ一定の傾向を示し、その人に特異な性質を形成してゐる。かく個人に特異な性質を個性といふ。

個性は個人に即して考へられる外、尙他にも及ぼして考へられる。例へば、人間は動物と異なるとの意味で、人間一般の個性も考へられ、文化人は野蠻人に對して異なる性質をもつてゐるから、文化人の個性も考へられる。同様に、日本人と支那人との間には個性の差異があり、男性と女性との間にも種的の相違が考へられる。かくて種乃

個性の廣狹二義

至集團に特異な性質も亦、個性と名づけられる。かくの如く、個性といふ言葉は廣狹二義に使はれるが、併し普通には、前者の意味即ち個人に即して用ひられるのである。

### 個性の成立

個性の成立には二つの原因を擧げることが出来る。

一は個人乃至は集團に働く先天的並びに歴史的の事情であり、二は個人乃至は集團に働く後天的及び環境の影響である。これを個人について見れば、如何なる個人も父母を通じて祖先からの性質を繼承してゐるもので、一般に個人の性能は祖先の性能によつて規定され、先天的に定つてゐるといつてよい。併し、それのみでは個性を成さぬのであつて、個性は必ず生活の經驗及び生活の環境からの影響を受け、兩々相俟つて成立するものである。

個性成立の兩原因



## 第五篇 社會の心理

### 第一章 社會心意

社會心意の意義 それぞれの社會に於ては、その社會特有の諸種の思想感情及び意志があつて、それ等の知的要素と情意的要素とは、或優勢な觀念又は習慣に率ゐられて、同時に或は繼續的に相結合して活動してゐるものである。かく社會生活にその根據をもつた意識内容の組織的な結合及び活動、これを指して社會心意といふ。社會心意は、客觀的には言論著述・風俗・慣習・法律等として、又主觀的には個人の心に所謂義理・人情として發現するものである。

社會心意と個人心意人は一般には、社會心意によつて支配されるものであるが、又時としては、偉人・英雄等の出現によつて、その社會心意

が導かれることもある。けれども、その個人の心意中にも義理・人情の如き社會心意が絶えず動いてゐる點から考へると、社會心意と個人心意とは、何れか一つが根本と定められるべきものでなく、寧ろ兩者は元來同根で、共に或種の本能から發現したものといつてよい。

### 第二章 社會意志

社會意志の意義 社會心意は、時として或目的を實現しようとして活動することがある。これを社會意志といふ。そしてその活動の姿に、衝動的・獨斷的・思慮的の三種がある。

一、衝動的 前後左右の關係等を思慮することなく、直に動作を起すのが衝動的社會意志である。群衆の動作に於て往々存外の不道徳や亂暴が行はれるのは、蓋し群衆の中であるため、各人が興奮し易く、その結果、<sup>〔一〕</sup>大切な批判力を失ひ、<sup>〔二〕</sup>感情が激發して雷同的となり、<sup>〔三〕</sup>

社會意志活動の姿

衝動的社會意志の活動情態

群衆心理の特徴



暴動

獨斷的社會意志の活動情態

摸倣の傾向が著しくなり、<sup>四</sup>暗示性も亦増大し、<sup>五</sup>從つて、自己を制御し得ないやうになるからである。これが、所謂群衆心理の特徴で、かの暴動の如きは、その適例である。

二、獨斷的 或觀念に執着して、これを貫徹しようとする心意を獨斷的社會意志といふ。かの西曆十九世紀の初頭に於けるフランス革命の如きは、人間が平等であるといふことが獨斷的に信ぜられて、それよりも更に重要な他の關係は顧みられず、端的に爆發したものである。

三、思慮的 社會關係が複雑となるに從つて、獨斷的觀念を遂行することが不可能となり、こゝに社會意志は思慮的となる。思慮的社會意志の特徴は、それが批判的となり、協動的に動作する點にある。所謂公論は思慮的社會意志の發現といつてよい。即ち、こゝに或主張があれば、これに對して反對の主張も現れる。そして相互にその根

思慮的社會意志の特徴

公論

社會意志の發達と個人心理の發達

據を比較し考究して、然る後始めて得られた結論だからである。

社會意志の發達 社會意志は、概していへば、衝動的から獨斷的に、獨斷的から思慮的へと進むもので、これを個人についていへば、衝動的は兒童の時代に當り、獨斷的は青年期の心理情態に、又思慮的は成人のそれと相應するのを認める。



## 第六篇 環境の心理

### 第一章 環境の意義

環境とは何か 吾等の日常生活は、例へば土・水・光線・空氣、或は動植物等の自然物を始め、家屋・衣服・机・書物等の文化的産物、並びに兩親兄弟姉妹・朋友等の複雑な事物や人物によつて取巻かれてゐる。一般にこれを外界と呼び、又は廣義の環境といふ。この廣義の環境の中で、個人に影響を與へる部分が、狹義の環境である。外界即ち廣義の環境は變らぬにしても、狹義の環境は兒童の年齢や發達段階に従つて變つて行くものである。

廣義の環境  
狹義の環境

### 第二章 環境の力

心理的場 兒童の行動は、兒童自身の個性と環境とに従つて行はれる。兒童にとつては、環境は唯眼に視える場所だけでなく、例へば、成人から禁止されたり、他の兒童から制限を受けたり、乃至は彼自らの身體や知能の程度等によつて、彼は一定の心理的環境にゐるのである。然もその環境は固定せるものでなく、瞬間的な條件によつても變る。この兒童とその活動範圍とを含む環境の瞬間的な情態を、心理的場と名づける。

心理的場の具體的な力 心理的場の中には、兒童の活動に直接働きかける幾つかの力がある。即ち、心理的場の中のものには、兒童に對し、食べるとか、いぢるとか、攀ぢ登るとかの行動を起させる。これをその誘發性といふ。誘發性には、それぞれ種類や強度がある。一つの心理的場に於て、力の等しい幾つかの誘發性が現れる場合、そこに軋轢が起る。この軋轢は兒童に緊張情態を生じさせるが、兒童は常に緊

心理的場の成立

心理的場の誘發性  
と緊張關係



張關係にありながら、それを克服するか、せぬかによつて、自己を統制するか、或は不安な情勢にあるかになる。併し、この關係があることによつて、兒童の意志は十分に伸長することが出来る。若し兒童が、兩親や兄弟から絶えず威嚇を受けるとか、又は他の成人によつて常に壓せられるとか、乃至は大きな事件や出来事等のために、何等の自由も許されぬ場合には、眞の軋轢情態が起つて來ない。その場合、兒童は心理的負擔に堪へないで、全く萎縮してしまつたり、或は自我を包皮して、周圍の影響に感じない程も頑固になつてしまつたりする。この意味に於て、環境の力は兒童の心身の發達に大きな影響を與へるものである。

### 第三章 環境の心理と教育

生長と環境 幼兒は環境の中に於て、環境を介して、自然に一定の生

環境の要素と幼兒の性格

素質

教育上環境整理の意義

長を遂げる。環境の良否は直に幼兒の上に反映し、幼兒の發育に極めて重大な影響を與へる。人は幼い頃から、家庭やその附近及び學校等に於て、他からの影響によつて、その言語・慣習・信仰様式等の形成されることが多く、幼兒の知能や行動の要素には、多分に環境の成分が入つてゐるのである。

素質と環境 かやうに、環境は自然的に幼兒に大きな影響を及ぼすものであるが、更に又、絶えず目標を示して幼兒を誘發し、その獲得に刺激を與へるものである。故に、如何に素質が良好であつても、環境に恵まれなければ、十分の發達は見られないのである。素質とは生來固有の力をいふ。

環境の整理 幼兒は環境に順應し、反撥して、生長するのであるから、教育上から見れば、心理的に幼兒を壓迫したり拘束したりするやうな要素は、成るべくこれを取り除き、常に幼兒を誘發性の軋轢即ち緊



張情態に置き、そして、よくそれを克服し、意志を自由に發現させるやうに環境を整理し、性格の形成に都合のよい環境を與へることに努めねばならぬのである。

## 第七篇 學級の心理

### 第一章 學級の構造

學級の性質 學級は、豫め教育といふ軌道に乗せられた團體であつて、家庭のやうな自然社會ではない。併し、兒童は實際に於て、かやうな意識の下に結合してゐるのでなく、寧ろ、年齢及び思考、感情等の同じいことから、互に理會し合ひ、その間に融和を生じて、全く自然に學級を造つてゐる。故に、目的に依る結合といふよりも、情緒的の結合に基づいてゐる。然も兒童は、學級に於て、自由な相互協力の勞作を通じて、個性を發展させ、自己を向上させて行くのであるから、學級は一つの生活共同社會といつてよい。

學級の心意構造 學級には、各個兒童の心的總和とは考へられざる、



一つに動く全體  
心意

然も全體がそれに結合し依存してゐる心意構造がある。それは、個々の兒童の心的性質から産み出されたものではあるが、逆に又、個々の兒童の心意に働きかけて、それを統一する全體の心意となつて現れる。學級の心理的構造は實に、この一つに動く全體心意の如何に懸つてゐるのである。

### 第二章 學級の性格

學級に働く心理 學級は、年齢及び心意のほゞ同様な兒童によつて造られてゐるのだから、そこには、一面に於ては、強く摸倣・暗示・同化・支配・服従等の心理が働くと共に、他面に於ては、常に競争・嫉妬・憎惡等の心理も働く。かくて、學級は幾つかの關係に分れる。その關係の主なものを挙げると、次の如くである。

その關係の主なもの

一、相互關係 これは、互に他を尊重し、自由な平等の關係に於て相結

合してゐることであつて、他の社會に見られるやうな力の關係に依らない關係をいふ。

二、對立關係 これは、相互關係が自由の平等な結合であるのに反し、性格の相違や成績の優劣等に依つて、心理的に相互に對立し、相容れざる關係にあることをいふ。

三、競争關係 これは、自己と他人とを比較し、自己の優位を主張しようとするのであつて、あらゆる社會關係にも見られるが、特に學級に於ては、年齢・境遇等の類似から、それが強く現れる。

四、争闘關係 これは、競争關係に更に嫉妬や憎惡が加つたもので、相互に反撥し合ひ、抗争し合つて、他を退けようとする關係にあることをいふ。

五、信順關係 これは、兒童相互の自發的尊敬や愛情によつて信賴し合ひ、依存し合つて、一つに結合せる關係にあることをいふ。こ



の関係では、秀でた児童の個性や意志によつて、學級全體が統一され、率ゐられる。そして、それが幾つかの集團に分れても、相争ふやうなことがない。

六、孤立關係　これは、或児童が、他の児童に比べて餘りに幼稚であるか、又は餘りにませてゐるため、心理的に他の児童と一致せず、消極的に無視されてゐるか、或は非社會性のためや児童間の偏見や嫉妬のために、積極的に排除されてゐる場合をいふ。

これ等の關係が複合し、永續的性質を帯びて來るやうになると、そこに一つの性格が現れて來る。そして、これが學級活動の基礎となり、慣習や道德を生じ、やがて學級の象徴や精神といったものにまで高まる。かくて、學級が或は快活であるとか、或は自治的進取的であるとか、乃至は、溫和で團結力があるとかいふやうな性格が出來るのである。

立 學級の性格の成

### 第三章 學級の心理と教育

學級の性格の發達　學級の性格は、學年の進むに従つて漸次發達し行くもので、最初から明瞭なものではない。尋常小學校の一二學年頃は全く教師中心で、教師の態度に左右され、三四學年頃になると稍纏まつた一つの活動が見られるやうになる。併し、まだ自治的にはなり得ず、その活動も積極的でない。五六學年頃になつて、始めて活動が自治的となり、學級の道德觀が高まつて來る。そして、學級の活動の中心は教師の側から児童の側に移り、児童相互の自治統制が著しくなる。かくて高等科に至ると、殆ど全く自治的となるのである。

學年の高下に應じた教育上の注意　故に次の注意が必要である。

一、尋常科低學年では、常に親愛の情を以て児童を見まもり、教師の模範人格に依つて、絶えず彼等を伸び伸びとした空氣の中に嚮

尋常科低學年の注意



同中學年の注意

導して行くやう、心懸けねばならぬ。

二、同中學年頃になると、兒童の働きが個人的に生長しては來ても、まだ社會的、自治的でないので、その行動も、腕力に訴へて他を従へたり、露骨な報復が行はれたりし易いから、明確な目標を定め、それに據らせるべきである。

三、同高學年及び高等科に進んでは、よく社會、特に成人と兒童とを含んだ社會に於ける適正な關係を理會させ、相互の約束や協力に忠實であるやうに指導しなければならぬ。

同高學年及び高等科の注意

## 第八篇 學習の心理

### 第一章 學習の概説

學習の意義 學習には、極めて簡単なものから頗る複雑なものに至るまで、種々の程度があるけれども、何れも皆天賦的性質の發達中に於て習ひ覺えるのであつて、吾等の有する知識及び熟練せる運動は皆、天賦性の基礎の上にこれを獲得したものである。兒童は生長に伴ひ、生得的性質に關係なしに、新しいものを習ひ覺えるのではない。習得即ち學習は、生得的のものから次第に發達するのであつて、從つて學習せるものは、天賦性が外界との接觸に於て漸次變化した結果である。それ故に學習とは、天賦性が既に獲得せる經驗を基礎として、新しい經驗を獲得することである。

天賦性と習得



## 第二章 學習の種類

一、消極的適應 動物に對して、無害で且無意味な刺激を、次ぎ次ぎに與へると、始は動物は防禦的の動作をするが、併し尙その刺激を繰返す時は、暫らくにして何等の反應をもしないやうになる。即ち本能的の反應を統御するに至るのである。これを消極的適應といふ。例へば、蜘蛛がその網の巢に居る時、音叉を鳴らすと、蜘蛛は地上に落ちるといふ保護的動作をする。その蜘蛛が巢に復つた時、又音叉を鳴らすと、蜘蛛は再び地上に落ちる。併し速かにこの刺激を反復すること數回に及ぶ時は、地上に落ちるといふ反應を止めるやうになる。このことを數日間繰返す時は、その刺激に反應することを永久に止めてしまふのである。人がその周圍の事物に馴れ、眼前の無用な物や、無用な音に馴れるのも亦、この消極的適應である。

蜘蛛についての實驗

吾等の消極的適應

犬についての實驗

吾等の條件反射

二、條件反射 犬に食物を與へると同時に、鈴を鳴らすことを繰返す時は、遂には鈴を鳴らすだけでも、犬はこれに反應して唾液を出すやうになる。即ち鈴は代用刺激で、かゝる反應を條件反射といふ。條件反射は日常吾等の經驗に於ても頗る多い。食事の合圖を聞けば唾液が出で、食物の名を聞いても唾液が出る等皆然りである。兒童の條件反射については、教育上注意すべきものがある。例へば、猫に對して恐れを抱かず、却つてこれに手を觸れようとする幼兒があるとする。その幼兒が猫に手を觸れようとする時に、幼兒の背後で大きな怒つたやうな聲を與へるならば、その幼兒は恐れて急に手を引く。二三回同様のことを繰返すと、その幼兒は猫を怖れるやうになる。

三、試行錯誤による學習 試行錯誤法は、前に述べたやうに、手當り次第に種々の動作を行つて、遂には偶然に成功するに至る方法である。

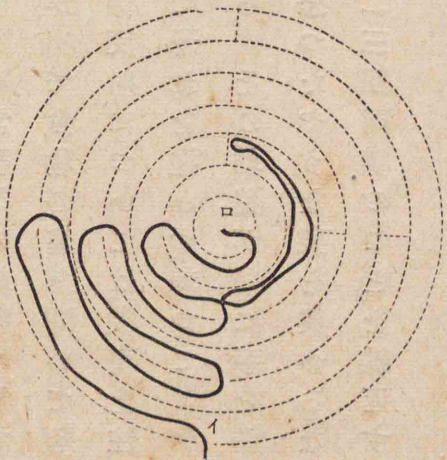


鼠についての實驗

行動による學習

第三十一圖  
の説明  
イ、食入  
ロ、餌口

第三十一圖  
學習を實驗する迷路



左圖は迷路を用ひて、鼠の行動について、その學習の有様を實驗したもので、鼠は絶えず試行錯誤法を取り、第六十二回目には、遂に實線で示された通路を取るに至つたのである。この法による學習は、行動によつて學習するのであつて、推理や觀察によつて學習するのではない。併し吾等に於ても、かかる試行錯誤的學習をする場合がある。例へば、物を懸ける釘を打つ運動の技術の如きは、思慮的に行ふといふよりは、寧ろ試行錯誤法によつて、前の試みを變化させつゝ、遂には成功するのである。

四、觀察による學習 吾等は實行によつて學習するけれども、單に實

觀察と摸倣

行によつてのみ學ぶのではない。少なくとも人間は、觀察することによつても亦學習するものである。兒童は、年上の者の行動をよく觀察し、そして餘程後になつても、機會があれば摸倣してみるものである。例へば、兒童は新しい言葉を聴いても、直ぐにはそれを正しく言ふことが出来ぬ。その時は言葉を聴いても、それを眞似しようとはしないが、後に機會があれば、それを自ら發音してみる。觀察によつて學習する時は、學習の初期に於ても、その効果は多く、且學習の進歩が速い。

分解と綜合

五、思考による學習 觀察による學習が進めば、思考によつて學習するやうになる。行動を開始する前に、以前に觀察したところを喚び起し、これを心中で色々分解綜合してみることもある。かやうに、靜かに考へて學習する時は、徒勞がない。但し、幼い兒童に早くからこれを望むことは困難である。

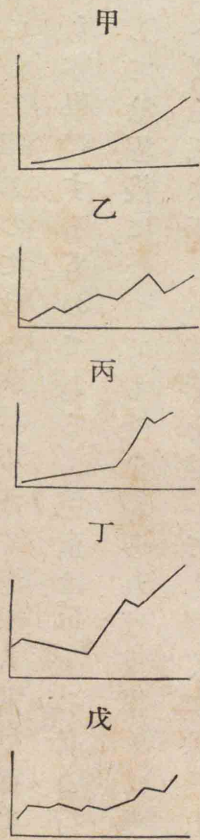


### 第三章 作業の學習

作業曲線 繼續して作業を行ふ時は、その成績は前後一様でない。例へば、最初困難な作業も、その進行に伴ひ、漸次に調子づいて來て一般に能率を高め、後には疲勞を生じて却つて能率を減ずるが如きこれである。かく一定期間に於ける作業量の變化を表した曲線を作業曲線といふ。作業の進行に影響を及ぼす條件の主なものゝを挙げると、練習・疲勞・習慣・興奮及び注意の情態等である。

學習效果の標式 學習の進路は、個人の特質、作業の進行に影響を及

圖二十三第  
圖式標の果效習練



練習效果の標式

直進式

律動的上昇式

掉尾式

中段休止式

停滞式

學習效果増大の條件

ぼす條件等によつて違ふが、大體右圖の如き五種の標式がある。

右の五種に於て、甲は、初から常に一樣の進歩を示すもので、その進路は殆ど斜線の狀をなしてゐ、これを直進式といふ。乙は、その性質は少しも甲と違はぬが、その進路は一上一下して鋸齒の狀を呈してゐ、これを律動的上昇式といふ。丙は、練習の効果が暫らく現れず、その末期に至つて急進するもので、これを掉尾式と稱する。丁は中途に於て永い停滞をもつもので、中段休止式と呼ばれる。最後の戊に至つては、練習によつて發達することが極めて少なく、その過程線は大體に於て水平の方向を示すもので、停滞式と名づけられる。

練習の教育的取扱 學校に於ける課業は皆學習作業である。その

效果を増大ならせるには、次の諸點を必要とする。

- 一、興味を以て作業を遂行させること。
- 二、努力を以て事に當らせること。



- 三、一時に練習の度数を多くさせるよりも、前の練習の効果の消滅しない限りに於て、多少の時間を隔て、練習させること。
- 四、稍長じた児童には観察による學習を試みること。
- 五、練習はその働きが機械化するまで、これを繼續させること。

#### 第四章 疲勞

疲勞とは何か 疲勞とは、勢力消耗の現象で、作業に伴ふ必然の出來事である。その進行の工合は、三段に分かれる。即ち、第一段階では、作業の速さは増加して行くが、その質は漸次に低下して行き、第二段階では、作業の量も質も共に減少し、更に第三段階に至つては、疲勞が極點に達して遂に疲憊の狀に陥るのである。

疲勞の恢復 疲勞を恢復するには、休息と睡眠とを取らねばならぬ。休息は、局部疲勞を恢復するものであるが、又練習によつて起つて來

疲勞進行の三段階

た興奮と注意の順應とを消耗させる弱點もあるから、休息の時期長さ及び方法には、十分な考慮が要る。睡眠は、通例、規則正しく生じて來る現象で、これによつて疲勞を恢復し、新勢力を得るものである。その長短・深淺は、年齢・心身の情態及び季節の相違等によつて一様でないが、幼少の者ほど多くの睡眠時間を要するのである。



### 第九篇 心性考查

#### 第一章 心性考查の意義

心性とその考查 吾等は、諸種の方向に發展し得る能力をもつて生れてゐるもので、この素質は教育感化等の影響を受けて發達し、そこに氣質・性格等の所謂心意構造が造られる。かゝる心意構造を心性と名づけ、これを調べることを心性考查といふ。心性は通常、これを知能的と情意的との二方面に分けて考へられるから、これが考查も亦この兩方面に分けられる。

#### 第二章 知能考查

知能

知能とその考查 知能とは、前述の如く、素質が教育感化等の影響を

心性

心性考查

知能考查

感覺上の差異

知覺上の差異

注意上の差異

記憶上の差異

想像上の差異

受けて成立した人間の力であつて、吾等が日常新しい境遇に接して、これを處理し得る能力をいふ。この能力は性質上と分量上との兩方面から、これを考查することが出来る。

知能の性質上の差異先づ感覺について考察するに、人の感覺には鈍の差があり、その差は感覺の種類によつても違ふ。聽覺に鋭い兒童もあれば、視覺に敏い兒童もある。次に知覺の鋭鈍にも亦差異がある。線の長さを目測する場合に、人々はその正確さを異にするが如き、その實例である。注意の働きに於ても、集中に長ざる者もあれば配分に長ざる者もあり、記憶の働きに、視覺型・聽覺型・運動型等の相違のあることは、既に述べた通りである。

想像作用にも差異があり、大體これを二つに分けることが出来る。その想像觀念が明瞭に再生する者は直觀的と呼ばれ、能動的に變形して特別の觀念を創造する者は結合的と稱へられる。思考作用にも



思考上の差異

亦二つの型があり、個々の事實を纏めて一般的の原理を造る者は歸納的であり、その反對に、一般的の原理から個々の場合を説明する者は演繹的である。そこで、想像作用と思考作用とが結合すると、上に

四種の材能

思考

表示する如く、四種の材能が生ずる。即ち先

觀察的材能

歸納的 演繹的

づ直觀的想像と歸納的思考とが結合すると、

直觀的

觀察的 分析的

觀察的材能となる。事物を緻密に觀察する

想像

結合的

發明的 思索的

のがその特徴で、その實例は實際家に多く見られる。次に、直觀的想像と演繹的思考とが

分析的材能

發明的材能

思索的材能

然科學者には、この型が多い。次に、結合的想像と歸納的思考とが合すると、發明的材能となつて現れ、科學工藝等に於ける發明家、發見家に著しい。更に、結合的想像と演繹的思考とが合すると、思索的材能が生れるので、哲學者並びに學者にこの型が多いのである。

曆年齢

知能年齢

知能率

$$\text{知能率} = \frac{\text{知能年齢}}{\text{曆年齢}} \times 100$$

知能の分量上の差異これを調べるのに色々の方法が考へ出されたが、最も名高いのは、曆の年齢と知能の年齢とを區別する見地に立つて、後者を檢定することを主眼とする方法である。この法に於ては、各の曆年齢に對して數個宛の課問が設けられてあつて、兒童がそれ等を悉く通過すれば、その知能年齢はその曆年齢と同じいと認められる。若し曆年齢は七歳でありながら、六歳までの課問にしか應答し得ない時には、その知能年齢はこれを六歳とするのである。かくて、曆年齢で知能年齢を除し、それに一〇〇を乗じて得た數を以てその知能率とするのである。その式を示すと上の如くである。そして、知能率一〇〇以上のものは尋凡より優れた者、又一〇〇以下のものは尋凡より劣つたものとし、かくして人間の知能の程度を示すのである。

知能の遺傳 知能は、素質が環境によつて發達したものであるが、



知能程度の恒常性

兄弟姉妹の知能上の類似

低能の遺傳

次の如き事實により、餘程の程度まで遺傳するものと考へられる。

[一] 知能の程度は、兒童の時期から成人の時期に至るまで恒常的であつて、變化することが少ない。愚鈍の子供は、立派な親がその教育に努力しても、生來の限界以上にこれを進めることが難かしい。[二] 同じ家族の人々の間には、心意的類似が高い。兄弟姉妹を検査して見れば、社會から手當り次第に選ばれた兒童相互間に於けるよりも一層よく似てゐる。雙生兒を検査してみれば、普通の兄弟よりも尙よく似てゐる。又先祖に知能の低劣なものがあると、兩親は正常であつても、時として低能兒が生れる。片親が正常であるならば、その子供の幾人かは正常であり、他は低能である。又兩親が共に低能であるならば、その子供が概ね低能であり、少なくとも愚鈍である。これ等の事實から考へると、知能の程度は天賦的に遺傳されるもので、環境によつて支配されるところが割合に少ないやうである。

### 第三章 情意考查

情意

情意考查

情意考查の眼目

情意考查の方法

品等法

情意とその考查 情意とは感情と意志との兩方面を含み、性格情操・道徳的判斷等はこれに屬する。但し情意は理想に向つて進みつゝあるものだから、その考查は發達の見地から行はれる必要があり、その場合特に要件となるものは、教育と環境とである。殊に我が國に於ては、教育に關する勅語が教育の根幹であり、道徳教育の中心であるから、教育に關する勅語に示された徳目が情意考查の眼目とならねばならぬ。そして、それに生活上の一般事情及び地方の實情等が加へらるべきであらう。

情意考查の方法としては、品等法・檢診法・科學的測定法等がある。

[一] 品等法とは、品等の規準を定めて置いて、これを兒童に適用して檢定するもので、例へば、勤勉の程度を五段階に分ち、各段階の特質を豫



検診法

め定め、児童の勤勉の度をそれに依つて評定するが如きである。〔一〕  
検診法とは、この品等法の主観的要素を出来る限り取除き、検査の結果を正確ならせようとするものである。即ち、情緒の現れる事情を集めて規準を作り、これを児童の情意活動に適用して、その結果により判定するものである。〔三〕科學的測定法は科學的に測定しようとするものであるが、対象が情意なだけに、精密な測定は猶困難である。

科學的測定法

#### 第四章 心性考査と教育

知能考査の活用

教育上への活用 心性考査は、種々の點に於て教育上に重要な關係をもつ。知能考査の結果は、教授・學習の改善進歩を圖る上に役立つことが出来るのみならず、職業指導のためにも一方の根據を與へるものであり、情意考査は、訓育及び養護の方面に實際上の基礎を供する。職業指導については後に述べる。

情意考査の活用

### 第十篇 發達の心理

#### 第一章 心意發達の概説

##### 第一節 心意發達の意義

發達とは何か 吾等の心意は身體と密關して、年齢に従つてその姿を變へて行くものである。生後まだ日の浅い子供には、唯内に動く強い生命の力を窺ふことが出来るだけで、その活動に分化は現れないが、一箇年もたつと、話すことを始め、數箇年の後には、殆ど完全に物を解するやうになり、十數年の後には、ほぼ成人に等しい心意構造をもつて來る。即ちそこには、身體の變化は勿論のこと、心意の働きにも大きな變化があるのである。この變化を發達といふ。

發達



環境との輻合

発達と環境 かゝる発達は決してそれ自身に止まるものでなく、環境との輻合によつて起つて来る。心意の発達と環境とは不可分の関係にあるもので、心意は環境を通して次第に價值へと向上して行くのである。例へば、生活に直接に必要な、生物的欲求のみの支配を脱して、眞理や價値の要求に向ひ、高き文化價値を目ざして進むものである。

第二節 心意發達の段階

段階とは何か 心意の發達は漸次に行はれるやうに思はれるが、ここには自ら緩急の別がある。或時には眼に立つ急激な變化が現れ、或時にはそれが緩漫になつて一定の情態に止まる。謂はゞ變化の緩急が段階的な経過を辿つて發達を遂げるのである。それ故に、この多少とも急激な變化の始まる時期から、次の急激な變化の始まる

各段階の區別

時期までを、一つの段階と見ることが出来る。そして、このそれぞれ  
の段階には、相互に區別される明瞭な特質が見られるのである。  
發達の各段階 この特質に従つて、發達の各段階を次の如くに分けることが出来る。

- 第一 未分化統一期 幼兒期
- 第二 分化不統一期 兒童期
- 第三 分化統一期 青年期

但し、發達の時期は、これを年齢の上から劃然と分けることが容易でない。人の容貌や風采が様々であるやうに、その心意も人によつて、早く發達するものと遅く發達するものがあり、その程度にも強弱の差があつて、一見明瞭に區別することが難かしい場合が多い。併し大體に於て、ほゞ満一歳頃から七歳頃までを幼兒期といひ、七歳頃から十三四歳頃までを兒童期といひ、それ以後二十歳頃までを青



各段階の小別

充實期と伸長期  
と成熟期

年期と名づける。更に幼児期は、四歳頃までを前期とし、それ以後を後期とし、特に前期の中、三歳頃までを嬰兒期といふ。児童期も亦、十歳頃までを前期とし、それ以後を後期とする。そして一般に、幼児期及び児童期の中、その前期をそれぞれ第一、第二の充實期とし、その後期をそれぞれ第一、第二の伸長期といふ。これ等に對して青年期を成熟期とするのである。

## 第二章 幼児期の心理

### 第一節 幼児期の概説

言語と立行

幼児の心意生活 吾等人間には、言語と立行といふ二つの大きな特徴がある。人間はそれによつて他の動物から區別されるが、幼児は既に生後一箇年でこの言語と立行とを獲得し、その生涯の中で最も大きな發達を示すのである。尙それに續く五六年の間に心意生活

幼児期の特徴

未分化統一期たる所以

遊戯の時期

のそれぞれの層に於て、驚くべき發達を遂げる。これを心意生活の特徴から見ると、情緒生活と知的生活とに大別され、更に詳しくは、前者を情緒そのものと欲求とに、又後者を知覺・注意・記憶・想像・思考に分けることが出来る。併し、知的生活は情的生活ほど明瞭でなく、總じて情緒生活が主であり、それもまだ十分に分化されてゐない。同様に又この時期は、自他の區別が明かでなく、著しく環境に依存してゐる。この意味で幼児期を未分化統一の時期といふのである。

幼児期の生活を具體的の方面から眺めると、遊戯に於て見られる。遊戯は満ち溢れる衝動的活力の發現であり、幼児の生活は遊戯にあるといつてもよい。故にこの時期を又遊戯の時期ともいふ。

### 第二節 幼児の情緒生活

#### 第一 幼児の情緒



幼児の恐怖

幼児期の最初に現れ、且最も重要な役目をなすものは情緒である。次に若干の著しいものについて、幼児の情緒を述べよう。  
 恐怖 外界から刺激を受け、これと均衡のとれた情態が直には現れないで、何となく外部から抑へつけられるやうな不安な心意情態の続く場合がある。これを恐怖といふ。恐怖は生後六箇月頃から現れ、次第に知覚が擴大され、不幸な経験を重ねることに依つて、その對象が増大して行くが、判断が速かになり、運動が敏活に十分に出来るやうになるに従つて減少する。

幼児の憤怒

憤怒 憤怒も亦、幼児の心意に最も早く現れる情操で、主に自由が妨げられ欲求が退けられた時に起る。謂はゞ、幼児のもつ種々の欲求の均衡が害はれる場合、これに對して抵抗する情緒がそれである。二歳頃には、はつきりと見られ、三歳頃には痼癢を伴ひ、四歳頃には最も甚だしくなる。併し自我の意識が明かとなり、又經驗界が擴まり、

幼児の喜悅

道徳意識の發生するに伴つて、その形態も變り、現れる機會も少なくなる。

喜悅 喜悅は憤怒とは反對に、活動の自由が與へられ、欲求が充たされた場合に現れる。生後三四箇月では、例へば、あやされて喜ぶやうに、他から誘發された喜が主で、這ふ頃になると、自ら音を出したり、物を執へたりして喜ぶ欲求満足の喜悅感が見られる。次いで立つやうになると、自己昂揚の喜が現れ、かくて次第に自らの思考や行動の成功を喜ぶやうになる。併し幼児には、まだ社會的な喜は少ない。

幼児の愛情

愛情 愛情も満足から分化したものである。例へば、幼児の欲求が満たされ、親切にいたはられると、それを愉しむやうになる。この愉しい心の反應として、相手に親しみを覚え、これを喜ばせようとする。この反應が愛情である。愛情は最初、子と親との間にしか見られぬが、三歳以後になると、愛情の對象がかなり局限され、一つの傾向をも



幼児の憎悪

つて来る。併し、總じて猶稀薄で執着性をもたない。又それは何か受けようとする事よりも、與へようとする喜に發し、且心意の興奮だけでなく、心身未分のものである。

憎悪幼児には、愛を求め又これを與へようとする要求が強いが、それと反對な憎悪の感情も亦強い。併し、憎悪は本能的であるよりも、他から誘發された場合が多く、主に失はれた愛から起つて来る。この意味で、憎悪も一つの愛情である。そして、それは種々の形で現れる。例へば、羨望・失望・復讐・殘忍等は皆愛情の變形で、憎悪の一種と見られる。

幼児の嫉妬

嫉妬これも亦、憎悪の一つの特殊な形態で、愛情の失はれた場合に起る。例へば、これまで自分だけ可愛がられてゐた幼児が、弟妹の出生のため、両親の愛情が弟妹に移り、自分が孤立したと感ずる情態に置かれた場合などに生ずる。それは唯羨望を起すばかりでなく、そ

れを退けて自らこれに代らうとさへする。併し幼児の嫉妬は、それだけに止まり、且相手の不在の時は起らないのが一特色である。

第二 幼児の欲求

欲求も生得的なものであるが、明白な積極的自發活動を伴ふ點で、情緒と區別され、特に初は生理的・生物的欲求として現れる。これに所有慾・好奇心・社會的欲求・競争心・摸倣心がある。

幼児の所有慾

所有慾 幼児には、出生と共に直に吸乳の強い欲求が現れる。一歳半頃になると、把握の欲求が生じ、更に感覺・知覺の擴大につれて欲求も次第に増大し、目前に存せぬものをも要求するやうになる。ここに單なる生物的欲求から離れて、玩具・繪本・衣服等への價值的欲求が高まり、それを獨占して喜ぶ風が見られる。

幼児の好奇心

好奇心 幼児は、最初は専ら既知のものに對してのみ積極的に反應



し、未知のものに對しては恐怖を懷くが、六箇月頃からは、未知のものに對する好奇心が現れる。この場合、未知のものとは、既知のものを含む全體印象の一部分で、或程度、危険の感ぜられないものをいふ。平素見なれた成人が、顔にマスクをかけ、或は帽子を目深かにかぶつて突然現れた場合に、眼を見張るが如きは、それである。

幼兒には、一種の穿鑿的な好奇心が、かなり早くからある。即ち、生後八箇月頃になると、障子に穴をあけたり、戸棚の鍵に眼をつけたりする。三歳前後には、物を破壊することに興味を覚え、六歳頃になると、物を組立て、喜ぶ。これ皆好奇心の發現である。その代表的なものは、四歳以後盛に起る質問に於て見られる。

幼兒の社會的欲求

社會的欲求 人には群居の本能があつて、それが欲求の形をとつて現れる。この社會的欲求は、生後一二箇月から既に認められる。例へば、物の音と母親の聲とに異なつた反應を示すが如き、それである。

三箇月頃になると、笑を以て人を迎へ、七箇月頃には、自ら相手を求め、二人居ると相添ふやうになる。社會的欲求のこの最初の時期に次いで、友達との交際が始まる。二歳頃までは二人、三歳頃から三人の仲間が出来るが、五人以上になることは稀である。

幼兒の競争心

競争心 幼兒の交際が始まり、多少とも相手を理會し得るやうになると、言語・持物・行動等に於て相手と平等の關係に立たうとし、やがて相手に優越しようとする情緒が現れる。それが競争心である。反面には又、玩具が無いとか、衣服が穢いとか、運動が劣るとかの劣等感が起る。この劣等感を取戻さうとして現れるのが、反抗心である。

幼兒の摸倣心

摸倣心 競争心と並んで、幼兒の社會的欲求に見られる、最も著しいものは、摸倣心である。兒童が一つの集團を造ると、そこには所謂嚮導者が現れ、行動を支配し、仲間を代辨しようとする。他の者はこれに見習ひ、これを摸倣しようとする。従つて、この幼兒の摸倣的傾



向は一つの流行を産む。

### 第三節 幼兒の知的生活

#### 第一 幼兒の知覺と注意

幼兒の知覺

知覺幼兒の知覺は最初、靜止せる個體に止まるが、漸次物の形狀大小・色彩・遠近等に擴まつて行く。物の形狀は通常、一歳の終には十分ながら認められ、二歳頃からは、色ある物は色により、色なきものは光や影によつて、繪本や寫眞の形狀・事物を説明し得るやうになる。大小の知覺も、二歳では五割の誤があるが、三四歳では三割内外に減じて、かなり正確となる。形狀・大小とも六七歳には、ほぼ完全に知覺することが出来る。音の知覺は、半歳で律音と非律音とを聽分け、律音に對して活潑な運動を起す。併し初は律音と運動とが一致せず、二歳を超えて稍一致するやうになり、三四歳に及べば快調に合せて

踊るやうになる。又空間知覺から見れば、最初は手の届く範圍で空間を理會し、生後六箇月位で遠近が知覺される。時間知覺は空間知覺より遅れて發達し、評量の尺度を缺いてゐる。殊に幼兒には秒・分・時の考はなく、六歳を過ぎても、多くは秒・分・週・月等の語の意味が明かでない。従つて過去・現在・未來の理會は、幼兒期の終にならぬと判然しない。運動の知覺も遅れて發達するもので、五歳頃になつても、單に「犬がゐます」家があります等の個物を言表すに過ぎぬ。その動作に及ぶのは六歳以後である。これが出来る時、物相互の關係をば興味を以て執へるやうになる。故に知覺の發達は、靜的なものから動的なものへ、近いものから遠いものへ、具體的なものから抽象的なものへと進むことが判る。併し、一般に幼兒の知覺は運動に結合し、見たもの聞いたものは、直に表情や音聲となつて發散し、興味を以て體驗したことなどは、直ぐ運動となつて現れる。



幼児の注意

注意 幼児の注意は、最初は殆ど無意注意で、何か著しい興味を覺えるものに自然と注意を向ける。その注意の持続時間は、或學者に據ると上表の如くである。即ち、幼児でも二十分間から二十五分間位は、注意が續くものと見える。併し彼等の注意は、興味と密接に結合してゐるもので、その持続時間の長短も、興味によつて左右される。有意注意になると、持続力が極めて短く、二十秒間位で他に移り、長くとも五分間とは續かない。注意の範圍も、幼児期では狭いもので、最初は二つ以上の對象に注意を拂ふことが難かしい。幼児に一方に物を持たせ、他方に又物を與へると、前者を落すのでも判る。

第二 幼児の記憶と想像

幼児の記憶

記憶 幼児の記憶は、通常、笑の現れる三箇月頃からあるものと見られ、二歳頃からは、明かな形で營まれる。記憶には、銘記直後の記憶と、多少時間を経過した後、に憶ひ浮べる記憶との別があるが、前者は三四歳頃までは猶不確實であるが、五歳を超えると正確になつて来る。或學者の研究によると、幼児に或繪を五秒間見せ、それを他の繪の中から指摘させたところが、三歳乃至四歳では〇—十五、五歳では五—十五まで指摘することが出來たと報ぜられてゐる。又、記憶を永續の方面から見れば、既に一歳の幼児にも、再認識の形に於て認められる。併しそれは、僅かの人或は物に限られ、且屢、反復され又潜伏期の短いものである。二歳では數週間の潜伏期があり、三歳では數箇月、四歳では一箇年後も確實に再認識し得るやうになる。かくて漸次に記憶の永續性が生じて來るのである。對象についても亦、始は箇々の人又は物の印象だけであるが、二歳頃からは住んだ場所の



## 幼兒の想像

環境が再認識され、三歳頃になると、唯一度又は偶然遭遇した印象にも及ぶ。

想像は、幼兒期には活潑で、知覺や想起と區別されないことがある。幼兒には、唯力強い體驗が現實であり、現實と假象とは分れてゐず、心の中に現れて來るものは、總て肯定され信ぜられる。従つて童話や寓話に聽入つてゐる時、幼兒は成人と違ひ、決して假りの見方をせず、極めて眞面目であり眞劍である。かく幼兒の想像は、現實と假象との相違を無視するのみならず、實際の事物にも拘束されず、それには無頓着なのである。例へば、一片の紙を以て飛行機となし、一枚の葉を皿に擬して遊んでゐる。次に想像の連鎖について見れば、それは既に三四歳頃から現れ、その場合も成人のそれと異なり、概括的綜合を缺くのが特色である。例へば、人が馬になつたり、自動車は汽車になつたりする。

## 幼兒の思考

## 第三 幼兒の思考

思考幼兒の思考生活には次の如き特色がある。第一に、關係判斷が缺けてゐる。即ち、一方の考と他方の考とを對立させて、その關係を考へることが出來ない。幼兒は、一方を意識すると、それが謂はゞ自己であつて、他の考を同一の意識に於て對立させることが出來ぬのである。従つて第二に、並置混同矛盾が無視される。幼兒には部分と部分との關係を規定することが難かしく、兩者の釣合などは無視される。更に第三に、現在と過去との比較對照が困難である。従つて現に起りつゝあることを總て必然である如く考へ、偶然と必然とが混同される。第四に、かゝる思考の特質から、幼兒には特異な思考の世界が現れる。即ち、心と物との區別はなく、外物は總て生命をもち、生きたものゝやうに感ぜられる。かくて幼兒は自己中心で、自



他の區別がない。そこで喧嘩をしても、自分だけを主張し、他の主張を容れることが出来ぬ。

#### 第四節 幼兒の遊戯と運動

幼兒の遊戯

遊戯遊戯はそれ自體を目的とする自發活動である。その意義については種々の説があるが、併し遊戯は他の運動のやうに、外界の事情から生ずるものでなく、幼兒の自發活動にその根源があり、寧ろ快感を伴ふ機能の反復的運動と見られる。遊戯は年齢の發達に伴つて、その種類や形態が變つて行くものであるが、一般に幼兒の遊戯は、單純な作用遊戯、假作遊戯に始まり、好奇心や社會的欲求の發達につれて、簡單なものから構成的なものへ、又單獨なものから社會的なものへと發達して行くのが常である。

幼兒の運動

運動幼兒は手足の運動を以て、生活の第一步を始めるのであるが、

一箇月で頭を動かすことが出来る。三箇月で頭を持上げ、四箇月になると、僅かの支へでエンコし、九箇月で這ふやうになり、一年目には立つことが出来、二年半頃には片足で跳ぶやうになる。手も亦それに従つて、四箇月頃から物を握むやうになり、二歳頃になると、鉛筆で線を引くことが出来、三歳頃には三角や四角が書ける。この頃から、手足の隨意筋が發達して來て、六七歳頃には運動が知的に統制されるやうになる。併し十歳頃までは、まだ繊細な運動は出来ない。

#### 第五節 幼兒の數と言語

##### 第一 數

數の發達 幼兒の知的生活の中で、具體的の姿をとつて現れるものは、數と言語とであるが、數の發達は次の四期に分けられる。

第一期 數の觀念がまだ確には現れぬ漠然たる時期である。 滿二

幼兒の數

數發達の段階



歳頃の子供が幾つかの硝子玉を持つて遊んでゐる時に、その一つを隠すと、それを探すことがある。即ち物の數の變化には氣がつくのであるから、數に對する多少の意識は、これを認めることが出来る。

**第二期** 稍進むと、幼兒は母や父に教へられて、一つ二つといふ數を、指や箸などの實物に關係させて、數へるやうになる。これを繰返へすと、そこに自然と數の系列が出来る。この場合、最初は「一つ」が出来、他は「澤山」として區別され、次いで「一つ」「二つ」が出来、他は澤山で呼ばれる。かくて「三つ」が出来、やうになり、數の系列は漸次に擴大される。

**第三期** 數の系列が出来てくると、一つの數の集團から、他の集團に移つて行くやうになり、「一つ」と「一つ」は「二つ」であり、「一つ」と「二つ」は「三つ」であるといふやうに、加算の第一歩が現れる。

かやうに、數の發達は漠然たるものから數の系列に進み、更に加算・減算に進むのであるが、併し幼兒期では加減だけに止まる。又その

量の如きも、二十以上百以下の範圍にある。

## 第二 言語

### 幼兒の言語

**言語の發達** 幼兒の言語は、その發音も特殊であり、言葉の數に於ても、又その種類に於ても、成人とは違つたものをもつてゐる。その發達の段階は左の如くである。

**第一期** 叫聲の時期で、生後凡そ六週間である。最初の叫聲は寒氣・

飢餓の如き苦痛によつて發せられ、次いで怒によつて發せられる。

**第二期** 無意味の音聲を用ひる時期で、凡そ七週間目から一歳或は一歳二歳の終までである。そして始頃は「ア」「ブ」「アム」「バ」「ダ」「ラ」「ブ」の如き節音が盛んに用ひられる。これ一方には門齒の出現により、他方には期待・好奇・驚異等の本能が發達するからである。次いで一歳の後半期から「バー」「バー」「ダー」「ダー」「ダー」「ダー」の如く、音を反復する

### 言語發達の段階



ことがある。これ既に發音運動の韻律感情及び律音の系列に對する快感が起つてゐることを示すものである。この發音の準備が出来る一方で、他の音や聲の中から、さきに發音の出來たものが選ばれて、摸倣的に發音されるやうになる。「ウマウマ」の如きそれである。然もその初は、外界の音聲を何等理會なしに摸倣するが、更に生長すると、若干の語を理會するに至るのである。

第三期 眞の言語の時期である。即ち、聽いた言葉を理會する時期の後に、眞の言語を使用する時期が來るのである。「ワンワン」「パイパイ」等の如く、一つの言葉で始まつたものが、今は一つの言葉で多くの意味を兼ねたやうな一語文として現れる。「ワンワン」といへば、犬が來た。ことであり、犬が走つて行く。ことでもある。かくして自己の意志感情を音韻で示すやうになる。この言葉が次第に細かに分化され、「ワンワン」から「ワンワンキタ」となり、「ウマウマ」から「ウマウマチヨウ

ダイ」に發達し、所謂二語文が見られる。一歳四箇月乃至六箇月頃から、この發達が認められる。この時期に入ると、漸次語彙が増加し、發音も明瞭となつて來る。

第四期 幼兒の言語は、かく漸次に分化して來るのであるが、それが全體的に統一されて、綜合的に纏まつた文章の現れるのは、七歳又は八歳以後である。この時期になると、抽象的思考によつて共同的に談話を行ひ、又稍秩序立つた議論をするやうになる。

### 第三章 兒童期の心理

#### 第一節 兒童期の概説

兒童の心意生活 兒童期は、幼兒期の自己中心的な生活から青年期の社會的生活への過渡期である。未分化な情緒的生活が次第に失はれ、それに代つて知能が發達して來る。就中その前期では、想像が

自己中心的な生活から社會的生活への過渡期



兒童と郷土

分化不統一期たる所以

大きな役割を演じ、記憶も亦最も旺盛となる。併し知力は、まだ感性的なものが主であつて、抽象的なことはよく消化されない。又その後期に入つては、記憶も想像も悟性に支配され、思考は論理的なものに進む。かくて、兒童期は、一面には好奇心が發達し、蒐集本能が盛となり、珍らしいもの變つたものは勿論、成人の眼からは全く價値のないものまでも盛に蒐められる時期である。同時に兒童は、摸倣に巧みとなり、手工及び技巧に於て殊に目立つ。かゝる兒童の特性は、外界に向つて發動し、家庭及び學校を中心とした自然的、文化的環境に順應し、かくて兒童に、心安い親しい世界が造られるのであつて、これが即ち郷土である。従つて、この時期の生活上の特色は、郷土の獲得にあるといつてよい。但し兒童期は、凡ての生活が猶個別的、具體的であつて、まだ綜合的統一の情態には達してゐない。これ、この時期が分化不統一期といはれる所以である。

## 第二節 兒童の情緒生活

### 第一 兒童の情緒

幼兒期を通して分化し始めた情緒は、兒童期に入つては、それぞれの特質が稍鮮明に現れて來る。然も情緒を惹起す對象は、年齢と共に漸次多くなり、その深度も幼兒期に比して著しく進み、且永續的となる。次にその主要なものについて述べよう。

恐怖生活の領域が擴大したため、新に學校、教師、生徒に對する恐怖が現れる。これは未知なものに對する恐怖で、特に一人子、臆病な子、家庭で叱られ歪められてゐる子に多い。又、暗がり、幽靈化物等の所謂遺傳的恐怖も存し、寧ろ増加する傾向さへも見られる。これは知能が發達し、好奇心が増す代りに、多くの讀物や他人の話に接するか、それ等に影響され、又、想像の旺盛な割合に科學的知識の乏しいと

兒童の恐怖



## 兒童の憤怒

ころからも起る。併し、知力の益、發達するに従つて、かゝる遺傳的本能的の恐怖は漸次減少し、知的社會的の恐怖、例へば、身體、心意の自由を奪はれることや、友達からの不信用や、他人に比べての劣弱や、團體の嘲笑等に對する恐怖が、これに代つて著しくなつて來る。

憤怒、憤怒も亦、この頃は、自己中心の生活から學校や朋友との共同生活に移るために、社會的理由によつて起ることが多い。尋常科一學年の終頃には、かなり社會的心意が發達し、自己の親しい友達や教師の受ける被害や侮辱等は、自己のものと同じやうに感ぜられる。三學年頃にもなると、社會意識が更に擴大し、その憤怒も、學級全體の對級的憤怒を起すやうになり、五六學年頃には、母校の名譽のために義憤を發するやうになる。同時に他方には又、競争、嫉妬、羨望等の如き對人的情緒も發達し、教室や遊戲に於て、他の兒童が有利な地位に立ち、或はそれが教師によつて與へられたりすると、これを嫉視して、

## 兒童の愛情

烈しい怒を起し、高學年になると、不利な地位に置かれた者が團結して、共同的に行動し計畫するに至ることさへある。

愛情、兒童期に入つても、始頃は愛情と憎惡とが十分に分れてゐない。この頃は、精神分析者の所謂兩様性を示す時期で、例へば、犬や猫に對して、一面非常に可愛がるかと思へば、他面甚だしくこれを打擲し、冷酷に取扱つて喜ぶ。然も一般に感覺的で偏愛的である。自己に接近せるものを愛し、廣く愛することが出來ぬ。これ猶、自己中心的で、生活の領域が狭いためである。十歳頃になると、社會的感情が生じ、次第に學級、學校、團體等を愛するやうになり、自己犠牲の精神も幾分現れて來る。

## 兒童の同情

同情、兒童期に、愛情から分化される新しい特質の一つに、同情がある。併し、その前期ではまだ十分に分化せず、唯眼前に苦しんでゐるのを目撃すると同感を起すだけで、先方の身になつて見るほどの感



## 兒童の残忍

情移入はない。同情は十分に理會しなければ生ぜぬから、最初は唯若干想像を働かせて共感するに過ぎないのである。約十歳頃になると、思考や推理も發達して理會が進んで來るから、他人の災厄や困難に對して、強い憐憫や同情の念を起すやうになる。従つて兒童後期には、利己的・個人的の傾向が減つて、團體の利害が顧慮される。

残忍・残忍は同情の缺乏から起る。兒童は未だ死の何たるかを知らぬから、動物を苦しめ殺すことを却つて喜ぶ場合が多い。殊に苦痛の表情が人間的でない蜻蛉・蟬・魚類等に對しては、全然同情が起らない。兒童期の始に於ては、この残忍の行爲が強く現れてゐるが、九歳から十歳になると、漸次理會が廣まり、同情心が起きて來て、残忍は少なくなる。併し、残忍行爲の一種である「からかひ」は、既に四歳頃から現れ、犠牲者の憤怒や涕泣を見て却つて喜ぶ。これが高じて、遂には己が満足を得んがために他を苦しめるやうになる。所謂虐待性

## 兒童の羞恥

の傾向がそれである。

羞恥・羞恥も、早く二歳頃から見られる情緒であるが、兒童期に入つて自己意識が發達して來ると益々強くなる。他人と變つた行動を慎み、出來るだけ嘲笑を避けようとする。言語・服装・行爲等に亘つて單獨動作を避けて、教師や朋友の趣味や仕方に迎合するやうになり、又教師や朋友の不承認を恐れて、次第に利己的行動をしないやうになる。併し、羞恥は不正に對するばかりでなく、兒童によつては日常生活の一般に及ぶ場合がある。殊に神経質の兒童は、他人の視聽を恐れ、他人の前では話も讀書もなし得ない。かゝる兒童は、羞恥のために意志制止を生じたものである。

## 第二 兒童の欲求

兒童期を迎へて、思考や推理が進み、社會意識の發見するにつれて、



兒童の蒐集慾

欲求の種類や形態も、多少知的社會的傾向をとつて来る。併し、幼兒期の欲求の種類や形態が失はれたのでなく、唯その姿を變へ質を深めて現れるのである。故にこゝには、幼兒期と多少異なつた所謂兒童期の特色と見られるものだけについて述べよう。

蒐集慾 所有の欲求から分化したものととして、蒐集本能が現れ、郵便切手、礦物蝶、草花等を盛に蒐集する。併し最初は、これを何に使はうかといふ目的の意味はない。唯集めることに欲求を感じるのである。この傾向は、八歳から十歳頃の兒童に多く、特に男兒より女兒に多く見られる。それが稍進むと、これを貯へ、これを列べて楽しむやうになる。

兒童の知識慾

知識慾 幼兒の好奇心は、未知のものに對する驚駭、怪訝、恐怖等の混合したものであつたが、幼兒期の終から兒童期に入つては、益、穿鑿的なものとなり、自發的に種々の試みを行ふやうになる。然も兒童期

兒童の社會的欲求

は、漸く知的活動が盛となり、環境の事物や現象に興味を覺える時期であるから、それが知識慾となつて現れるのである。

社會的欲求 幼兒にも社會的欲求の發現はあるが、強く明確なものではない。それが明かに見られるのは、兒童期に入つてからであり、概ね十歳以後に現れる。特に尋常科中學年以上の兒童に多く、通例優越感と劣等感とを伴つて来る。即ち、他の者より優れたことを意識しようとし、反面には劣等感をも惹起すやうになる。例へば、課業の不出來な兒童、運動の拙劣な兒童、服裝の穢い兒童等は、かうした感を強く抱き、然もこれを取戻さうとして反抗心や抗爭心を起す。又この社會的欲求は、兒童によつて、非常に消極的、傍觀的な型と、積極的な型とに分れて現れる。前者に於ては、他の兒童を見ても、その仲間には入らずに、傍で冷笑してゐる者の如き、或は全く無關心である者の如きが、それであり、又、積極的の型は、自ら進んでそれに加はるか、或



はその進行を妨害したり、満足を傷けたりするやうな行爲を現す。他方、不正直、不誠意、亂暴、下品、不器用等も亦、これに關聯して考へられる。

### 第三節 兒童の知的生活

#### 第一 兒童の知覺と注意

兒童の知覺

知覺感覺の發達は既に幼兒期にあるのであつて、兒童期には著しい變化はないが、唯視覺・聽覺及び時間・空間等の知覺が、引續き發達し、精確になつて行くのが、その特色である。

視覺に於ては、色の知覺が稍精細となり、七八歳頃には、赤緑の辨別力が現れ、色盲等も明かとなつて、光や色に對する感覺は完成するものと見てよい。

聽覺も亦、ほゞ十歳前後を界として、音の高低・強弱・協音の評價等が

成人と同様になる。或學者によると、我が國の兒童は十一歳乃至十二歳頃に聽覺が完成される。

物の形狀・重量等の知覺も、七歳頃から明瞭となり、十歳でほゞ成人に近づく。但し、空間の知覺は稍遅れて、十一二歳で完成される。これに對して、時間の把握は一般に遅れて發達し、十一二歳になつても十分でない。

知覺は、一般に年少なほど未分化で、不確實ではあるが、その發達は徐々に進むから、目立つて變化することがない。男女兩性の間に於ける差異も、音の知覺は女兒が稍優り、空間・距離の辨別は男兒が幾分優つてゐるが、大體に於て甚だしい優劣の差はない。

注意幼兒の注意は、その持續時間及び範圍に於て極めて狭小で、一般に孤立した事物や人物を注意することが出來たに過ぎぬが、兒童期に入つては、個々の活動的な事物が注意を惹き、九歳から十歳頃に

兒童の注意



## 知覺發達の四段階

なると、空間・時間・因果關係等に注意を向けるやうになる。そして、二・三歳になると、事物の成分を性質的に分析して見ることも出来る。故に兒童期の注意は、七歳から九歳、九歳から十一歳、十一歳から十三歳、と三段階の進歩をなすもので、或學者はこれを活動期・關係期・性質期の三段階に分け、幼兒期の事物期と合せて、知覺發達の四段階として示してゐる。又、女兒は一般に、十一歳頃までは、男兒よりも注意力が若干強く、且それまでは著しく進歩するが、十一歳以後になると、男兒に劣つて来る。注意の範圍に於ても亦、十一歳頃までは女兒が稍優り、十四五歳以後は男兒が優るやうになる。

## 第二 兒童の記憶と思考

## 兒童の記憶

記憶の發達は、機械的なものから論理的なものへ進み、就中、機械的記憶は幼兒期にも多少の發達あることは、既に述べたが、それは

八歳から十歳までに於て頂點に達する。併し兒童期の特徴は、これに論理的記憶が加はつて、心意生活に知的色彩の漂ふことである。それは通常九歳頃に始まり、十四歳頃まで引續き發達し、こゝを一つの頂點として十五歳頃には一時衰へ、再び二十一・二歳頃まで發達して行くのである。要するに兒童期は、その初期に於て機械的記憶が著しく發達し、引續いて論理的記憶が現れ、總じて記憶活動の盛になる時期である。然もそれは、部分的・個別的な且靜的な記憶から、全體的意味の把握の記憶に向ひ、漸次、事物の構造が關聯を以て記憶されるやうになる。

## 兒童の思考

思考の記憶と同様、思考の著しい特色は、それが論理化されることである。幼兒の思考は總て動作で行はれたのであつて、事物は先づ動作的に執へられ、概念的には執へられない。概念的に執へられるのは、兒童期に入つてからである。そして、その發達は、八歳と九歳との



間と、十一歳と十二歳との間とに著しく、その他は徐々に進歩する。就中、類推は十三歳頃から急に發達するものと見られる。故に思考の發達も、靜的・個別的なものから動的・抽象的なものへ、又、部分的なものから全體的・意味的なものへと進むものである。そして、思考が論理的に統一されるに至ると、矛盾は避けられ、自己反省が始まり、自他の區別が生じ、かくて次第に、自己中心から離れるやうになる。併し兒童の初期にあつては猶、強く自己中心的傾向が見られ、十一歳頃までは全くこれを脱け切らない。謂はゞ過渡期である。即ち、思考の發達も記憶と同様、前後の二期に分れる。そして、そこに現れる一特色は、前期では女兒が著しく進み、後期では男兒が著しく進むことである。

#### 第四節 兒童の遊戯と作業

#### 兒童の遊戯

遊戯 幼兒期の遊戯が想像の世界に於て行はれたのに反して、兒童期の遊戯は現實の世界に於て行はれる。前者では模倣が主であつたが、後者では一定の目的を以て事物を支配しながら行はれる。兒童期に入ると、社會意識が生じ、競争意識が濃くなるにつれて、遊戯にも社會的なものや争闘的なものが喜ばれ、一定の規約に統制される競技や團體遊戯が好まれる。かく遊戯が社會的なものとなり、規則や規約によつて統制されると、知能によつても遊びの傾向が違つて來るものであるが、この時期には若干それが見られる。或學者に據ると、知能の秀でた兒童は、幾分獨り遊びに傾き、同じ遊びでも色々な遣り口を用ひ、又年長の遊び友達を求め、幼稚な遊びをしたがる。心意構造による遊戯のかゝる相違が、この時期には現れて來るのである。八歳を超えると、性別により遊戯の差異も現れる。男は男で集團を造



兒童の作業

り、女は女で集團を造り、男兒は主に戦争ごっこ、野球等の社會的競争的なものに傾き、女兒は細工もの、球つき、お手玉等の家庭的、女性的なものに偏る。

作業この時期には、遊戯から作業が分離して来る。即ち一定の目的に従ひ、計畫を立て、これを忍耐強く實行し、且その結果を反省するやうになる。これによつて、事物の性質や因果關係が理會され、そこに支配的興味が湧き、製作、實演等が行はれ、段々それに習熟するに至る。かくて、遊戯から次第に作業へと移つて行くのである。

第五節 兒童と環境

郷土の獲得 幼兒期が環境に依存せる衝動生活の時代であつたのに反して、兒童期は環境獲得の時代である。幼時期が環境の直觀的事物を個々別々に觀察するのに對して、兒童期になると、時間や空間

によつて變る事物の因果的關係に着目し、事物の性質を分解して理會するやうになる。従つて兒童は、日常接觸する感覺的事物に興味をもち、この方面から多くの事物を受け容れる。殊にその家庭遊戯、朋友等の直接の體驗から、自己を廻つて展開する自然的、文化的環境に親しみを覚え、無限の愛着を感じるに至る。即ち環境を心安い住み馴れた世界として受け取るのであつて、これが郷土の獲得である。環境に依存しながら、眞に環境の體驗をもたなかつた幼兒期から脱却して、環境の要求に對立しながら、環境によつて自我の欲求や感情を満足させようとするのが、正さに兒童期である。

兒童期の特色 兒童期の顯著な特色の第一は、知能の發達にある。思考に於ては論理的なものが芽生え、記憶も目立つて進み、判斷も亦次第に正確になつて来る。例へば、憤怒もこれを説明し得るやうになり、恐怖も判斷の發達に伴つて少なくなり、遊戯にも亦知的な要素



知能の發達と學  
習

が豊かとなる。かゝる知能の發達こそは、兒童期をば正さに學習の時期となす所以のものである。兒童は周圍のもの總てに興味をもち、これを知識として消化し、これを技能として收得し、所謂兒童の特別な世界を形造るのであつて、直前に述べた郷土の獲得も亦、兒童期の第二の特色なのである。

具體的有形的

併し、この知的生活はまだ十分なものではない。又、環境の獲得はあるにしても、それを純粹な客觀的世界として體驗することが困難である。個々の行爲についても亦、善惡の判斷は出來ても、それを統一した道德原理の體系は、まだ展開して來ない。更に衝動的情緒の世界は脱してゐるが、未だ意志の獨自な發達は見られない。従つて兒童の生活は、いつも具體的であり有形的である。

#### 第四章 青年期の心理

##### 第一節 青年期の概説

感情の世界の擴大  
理知の世界の展開  
分化統一の時期に入る所以

青年の心意生活 青年期は、兒童期までに徐々に發育し、一先づ完成に向つて進んで來た心身が、再び著しい變化發育を遂げる時期である。即ち、兒童期の安定せる心意情態の中へ、新に極めて深刻な動搖の波立つて來る時期であつて、幼兒期に見られた情緒の著しい發動が今一度激しく起り、感情の世界の顯著な擴大を示すのである。知的生活に於ても亦、具體性よりも抽象性が強くなり、論理的傾向が喜ばれ、次第に理知の世界が展開して來る。その上、青年期に特有な現象は、種族本能が發現し、性的欲求が目覺めて來ることである。従つて社會生活に大きな關心がもたれ、それと共に生活の計畫が徐々に成立し、獨自の生活領域に入込むやうになる。かくて分化統一の時期が始まるのである。



## 青年の感情

## 第二節 青年の感情生活

感情の激烈と動搖 兒童期に於ても種々な感情が現れ、その生活には多くの情緒的色彩が漂つてゐるが、併しそれは忘れ易いものである。これに對して青年期に於ては、その情緒は強い激しさをもち、常規を逸して感情に走るやうになる。或場合には欣喜雀躍し、相抱いて喜ぶかと思ふと、忽ち髪をむしつて絶望し、極めて深刻に悲しむやうなことが屢ある。又或場合には驚くばかり大膽となり、間もなく如何ともなし難いほど臆病となる。かやうに青年期は、感情の動搖が激しいから、心意が常に不安定で、樂觀と悲觀とが交互に起り、希望と絶望とが循環して現れる。殊にその前期に於ては、感情の動搖が多く、物事に溺れ易い。又、氣まぐれで、情熱に身を任せるやうにもなる。併し、その後期に入ると、動搖も減り、落着いて來るのが常である。

## 第三節 青年の知的生活

## 第一 青年の知覺

## 青年の感覺知覺

感覺知覺 一般に視覺は繊細となり、感情的色彩をも伴つて、色彩、光等に注意し、これ等に對する嗜好を示し、感想を洩らすやうになる。青年が服装や容姿に意を留め、繪畫や彫刻についての興味に個人的の差異を示すやうになるのも、これである。聽覺に於ても亦同様で、聽覺そのものが十歳頃で發達の絶頂に達するに拘らず、音に對しての深い興味を覺え、音樂の世界に理會と喜悅とをもつのは、青年期である。香臭の區別は、兒童期までは餘り、判然としてゐないが、青年期に入ると、種々の香臭を辨別し得るやうになり、好い香を求め、惡臭を排除する。味にも亦種々の感覺が現れ、あらゆるものを辨別し得るやうになる。皮膚覺も、從來は何の意味をもたなかつたのに、今は一



つの意味を示すやうになり、肌觸り・手觸りを氣にする。

## 第二 青年の思考と想像

青年の思考

思考 青年期の特色は思考の上にも著しく現れる。兒童期では、具體的なものが思考の全部であつたが、青年期には、それと合せて抽象的なものが考へられる。例へば、兒童には犬といつても、見たことのある具體的な犬しか考へられぬが、青年は犬を抽象して考へる。かやうに個々のものから一般性を抽象し得るやうになると、更に既知より未知に及び、現在から過去に遡り、未來を想ふことが出来るやうになる。この抽象性と共に、青年の思考に見られる一特色は、その論理的傾向である。兒童にも論理はあるが、單純で猶不完全である。然るに、青年期の論理は複雑となり、青年自身も亦論理を悦び、その合理性を誇るものである。

抽象性

合理性

批判性

次に又、青年は、この合理性に基づいて事物を判断し、合理的な立場からこれを批判する。青年は、その心意の發達するにつれて、接觸する部面も擴大し、種々な事象に接するのであるが、かゝる事物を合理的に批判し、かくして一定の理想が生れる。更に、かゝる批判性からして、價値の世界が彼等に擡頭して來る。宗教、藝術、道德、政治等の文化の世界に對する理會が生じ、それに憧れるやうになる。

理會性

青年の想像

想像 想像も亦、青年期の著しい特色である。青年期は一種の開花期にも譬へられる。そして、そこから現實に觸れ、外界に接しようとする。併し直に現實に觸れることが出来ないで、孤獨の中に、遠くから接觸と理會とを求めて止まない。かゝる憧憬から、この渴望を癒やさうとする一種の力が發展して來る。この力が、懸け離れたものと自己との間に橋をかけ、それを再び自己の生活の中へ引入れようとする。そこに想像が働く。青年に於ては、想像は實に心的擴大の



手段であり、自己形成に大きな役割を演ずるものである。

### 第三 青年と自我の發見

青年の自我 思考が抽象的となり、理知に訴へて事物を判断し得るやうになると、そこから自然に自我が擡頭して來る。勿論、自我は幼兒にもあるが、併し幼兒にとつては、それは單に活動の主體たるに止まり、まだ自我として意識に上つては來ない。青年の自我はこれと異なり、一つの世界として見出された主觀であり、あらゆる人間及び事物から離れた一つの世界として發見された自己である。そこに「自分」といふものが意識され、自分の欲求が自覺され、自分の尊嚴が考へられる。従つて、それは單なる自我ではなく、精神的な自我の意識である。この意識を取巻くものが、青年の強い感情であり、そこで青年には、強い自我感情が現れるのである。

一つの世界として發見された自己

### 第四節 青年と社會生活

兒童期にも社會意識の發達は見られたが、青年期になつて生活が知的にも情的にも豊かとなり、自我が發達して來ると、社會との關係も頗る變つて來る。即ち社會を、唯、人々の結合とのみは考へないで、その關係や動き、乃至はその共通な目的とか價值とかに着目する。従つて、社會に行はれる道德、宗教、政治、職業等に興味を覺え、意識や態度が強くこれ等の方面に向けられる。

#### 第一 青年と道德

青年の道德意識 青年期は、道德の發達に對して著しい變化の現れる時期である。勿論、兒童にも道德意識は相當に進んでゐるが、併し彼等には、まだ道德を創造し、それを自分の考で行ふほどの力が乏し



青年に於ける道徳發達の段階

く、寧ろ兩親や教師の權威に依る道徳に支配されてゐる。兒童期の終頃になると、この道徳上の教訓が自分のものとなり、青年期の始には、それを以て社會を見始める。ところが社會には、この道徳がそのまま行はれ難い場合があるから、そこで要求と現實との間に矛盾のあることに氣がつく。そのため、道徳の權威として信じてゐた隣人や教師にも疑をもち、自己も亦不安の念に包まれる。かくて一方には、道徳輕視の態度が現れて、動もすれば粗暴に流れ、權威に反抗しようとしたり、他方には、與へられた道徳を批判し反省して、自己の道徳世界を造らうとしたりする。かうした段階を経て、更に一般的な道徳觀が出来て、これを實際の生活に於ける規準たせようとする。かくて青年の道徳は、社會に即して現實性をもつたものとなる。

## 第二 青年と宗教

青年に於ける宗教意識發達の段階

青年の宗教意識 兒童には、まだ宗教的感情が分化してゐないが、青年期には、それが徐々に分化し始める。こゝにも三つの時期を分つことが出来る。即ち最初は、個人的に傳統的な宗教思想及び儀禮に入込まうとする時期であつて、これは暗黙の中に行はれ、殆ど氣付かれないこともある。次いで特殊な宗教的興味に目ざめ、何等かの宗教的要求、宗教的憧憬が生じ、然もそれが自然に起るだけでなく、探究的に内面から起ることもあり、従つて、心意構造全體の上に變化が始まつて来る。これに續いて、宗教に疑惑を抱き、これから離脱しようとしたり、煩悶を起したりする時期があつて、然る後落着くやうになる。

## 第三 青年と政治

青年の政治意識 青年は自我に目ざめると共に、生活の個々の領域



青年に於ける政治意識發達の段階

を探し求める。そこには、生存の意志が既に権力への意志として發現して來る。併し最初は漠然たる意識であつて、自己の目的や價値を社會に承認させようとする力をもたぬが、やがて、青年には二つの力が現れる。一は潑刺たる身體的活力から起る外的力で、二は魅惑や感動に基づく内的心意の力である。然るに青年は、身體的活力の旺盛な割合に心意生活の範圍が狭いため、権力への力は外的身體的な形をとつて現れ、青年特有の理想や空想と結びつき、團體を組んで冒險的な漂浪をしたり、又は狼籍をしたり、容易に暴力に訴へる等の場合がある。次いで精神的の時代が來る。自我が次第に發達して現實の社會を見得るやうになると、そこに動く偉大な政治的力に魅せられ、これに感激を覺えて、その渦中に飛込まうとする衝動に驅られたり、或はそこに見出す不正や虚偽に憎惡を感じて、争闘的本能に變つたりする。然も思慮を普く配る餘裕はなく、一徹に驀進する

虞が大きいのである。

#### 第四 青年と職業

青年に於ける職業意識發達の段階

青年の職業意識 青年の日常生活は、職業意識と密接に關係して動いてゐる。併し、この場合も、初は漠然と本能に具はる職業に對する意向に基づいてゐる。それが漸次、社會意識の發達につれ、職業決定の動機ともいふべき職業的魅惑、流行地位、收入等への深い關心を呼び起し、これに結びついて自己の稟賦及び特性が反省される。かゝる段階を経て始めて青年期には、國家と自己、職業と性能、成功と失敗等の諸方面が、實際の問題となつて來る。従つて青年の職業意識の發達は、青年の心意的發達と、職業それ自體の政治、法律、藝術、道德等諸方面への關係とが結びついて、起つて來るのである。かくて、職業の選擇指導の問題は、青年には特に重要な問題となる。



## 第十一篇 職業選擇の心理的基礎

### 第一章 職業と性能

職業の兩前提

職業と従業者 あらゆる職業は、その職業と、これに従事する人との兩要素から成立つてゐるから、職業選擇の基礎は二つの事柄を前提とする。一は、職業には心身の一定の特性を必要とするといふこと、二は、人には個人差があるといふこと、これである。

#### 第一節 職業の分化

現代職業の特色 今日如く、人知が進み文化が開けた社會に於ては、職業も亦著しく擴大され、分化され、且複雑である。それは、個人の精力や技倆では、その全力を傾けても殆ど堪へ切れぬ程のものとな

り、その上、能率の増進と生産の向上とが、職業の生命とも見られるやうになつてゐる。かくて、個人の習熟した力量や特殊の知能をば専門的に分殊させ、これ等を組織的に活用することが、現在では職業の必須條件となつた。今日に於ては、職業の特色は實に機械化・能率化・知能化・専門化にあるのであつて、職業が益々、分化的傾向を辿り、分業を以て唯一の手段となすのも、これがためである。

#### 第二節 性能の個人差

遺傳と環境 人には何人にも、他人と異なつた二つの特質がある。

第一は遺傳であり、第二は環境である。遺傳と環境とは、個人の體力や性能を規定するもので、この兩者が最初から違つてゐる以上、何人にも差異のあるのは、拒み得ないことである。先づ遺傳について考へると、祖先や兩親の素質は、その子孫に傳はる傾向がある。故に職

性能と遺傳



性能と環境

業の選擇に當つては、職業が特に恒常性をもつてゐる限り、遺傳の事實に注意を加へねばならぬ。次に環境の影響は、胎兒と生後とに別けて考へられるが、胎兒の時の母親の心身の情態や、生後に於ける食物の量や質や、本人の疾病や、家庭の貧富、職業の有無、乃至は家族の教養等は、何れも子女の身體及び性格に影響を及ぼすものである。要するに個人の性能特質は、遺傳と環境との二因子から構成され、各人の間に多くの個人差を現すのである。

## 第二章 職業の分析と適性検査

兩者の意義

その意義と必要 職業選擇の確實な基準を定めるためには、<sup>〔一〕</sup>職業を個人の性能に關係させて分析し、性能の種類と程度とを究めること、<sup>〔二〕</sup>各個人の性能を知能・體力・性格・技術・興味等に分け、一定の職業に必要な個人の特性を知ること、<sup>〔三〕</sup>が必要である。前者を職業分析

といひ、後者を適性検査といふ。そして、この兩者を比較對照して然る後始めて、適性によつて適職が選ばれることが出来る。

### 第一節 職業の分析

知能的職業と特殊能力的職業 各職業に含まれる心身の活動を觀察し、その職業を營むに必要な素質、即ち身體的・心意的資格を定めるのは、重要なことである。然も職業は、一方には、人の素質特に知能の程度によつて規定され、他方には、後天的影響を受けて發達した特殊な能力によつて規定される。故に職業は、知能的職業と特殊能力的職業との二つに別けて考へられる。

### 第二節 適性検査

心性考査との異同 適性検査とは、一定の職業に對し、適當した性能



の人を見出し、或は不適当な人を淘汰する方法であつて、従つて、心性  
 考査の如くに、個人の心性全般に亘つての長短を求め、必要はない。  
 一定の職業を要求する特定の性能に關して、各人の適否を検出すれ  
 ば、それでよい。併し又、就職後の成績の優秀な人を求めるのである  
 から、心性考査とは違つて、現在よりも、將來に重點を置かねばならぬ。  
 適性検査の方法 適性検査の方法は、左の如くである。

一、総合的検査 職業に含まれた實際作業を、そのまま、再現させて検  
 査する方法で、これに次の二種がある。

イ、雛形検査 職業の縮圖的雛形を使つて、その特性を検査する方法  
 で、例へば、電話交換手の採用試験に雛形配電盤を用ひ、呼出し及  
 び「反應」の作業を行はせ、その速度を検査するが如きをいふ。

ロ、作業検査 作業の一部を、そのまま、検査に適用して、各人の性能を  
 分つ方法で、例へば、命令を口頭で與へ、これを記憶復命させ、或は

計算作用を行はせる類である。

二、分析的検査 一定職業の作業を分析して、これを構成せる要素に  
 つき、それぞれ別個に検査して性能を判定するもので、これに左の二  
 種がある。

イ、類似検査 作業を構成要素を分ち、その要素たる操作を再現する  
 やうな検査を行ふ。電話交換手の採用試験に、スイッチ盤を摸  
 して、書物の中の一定の文字を抹消させるが如きである。

ロ、相關検査 以前の検査と就職後の成績との相關關係をとり、それ  
 を新たな適性検査に對して用ひる。

### 第三章 適性適職の心理的效果

#### 第一節 個人的效果

一、國民各員の幸福 一定の職業を求め、それによつて生を遂げるこ

適性適職の個人  
 的效果の各項



とは、國民の使命である。その際、自己の選んだ職業が自己の性能に合する時は、職業そのものに愉快を感じ、樂しみを覺え、喜悅と感謝、安易と希望とを以て、職務に勵精することが出来る。これこそ國民各員幸福の途である。

二、職業の藝術化 近時の職業は著しく機械化し、甚だしきは、人間が機械に使はれる情態を呈してゐる。かくては、職業生活が單調無味となり、苦痛をさへ伴ひ、心身を害することすら無いではない。然るに性能上の適職に就き、興味を以て作業に當り得る時は、かゝる機械化の傾向を逆に利用して、これを藝術化し、延いて無用の苦痛を避けることが出来る。

三、能率の増進 不適材は、作業が未熟で、原料を濫費し、時間を浪費して、尙且、作業が粗雑で、機械器具の破損も多く、事故過失、傷害の率は大きく、かくて著しい能率の減退を來すのであるが、適材は、これとは反

對に、その性能上、研究心が湧き、技術の熟達が速く、且比較的優秀となる等、總ての點で能率の増進に役立つのである。

四、協力の可能 近來の職業は、多くは分業により、多人數集つて共同の目的を達するのであるから、各人も、それぞれの能力を發揮して、これに協力せねばならぬ。然るに、未熟劣等な不適材を混じてゐるところは、全作業の組織の調節を混亂させ、能率の減弱を來す。適者にして、始めてよく全體の作業に協力調和することが出来るのである。

## 第二節 社會的效果

一、失業の防止 失業は、社會に能力の浪費者を増すことになつて、國家の損失となるのみならず、延いては秩序を紊し、腐敗を招き、社會を不安に陥れる。然るに、適材適職によつて失業を防止すれば、かゝる社會の不安は、これを未然に防ぐことが出来る。

適性適職の社會的效果の各項



二、轉職の回避 適材は、熟練が速く、直にその職業に興味を覚え、又、工夫を凝らして獨創的に勵精し得るから、昇進昇級も望まれ、轉職を回避することが出来る。轉職の回避は、國家・社會に利益を齎らす。

三、生産の増大 適材適職であれば、全員は有機的に全體の目的に向つて勵むから、能率や技術の上のみでなく、道德的にも思想的にも、秩序が保たれ、延いて總員の協力による生産の増大が期待される。

四、社會の安定 失業・轉職のために、人が覇氣を失ひ、品性の墮落を招き、延いては自暴自棄に陥ると、その結果、道德が紊れ、秩序が無視され、社會の不安を増すのであるが、幸に適材適職で、失業・轉職が少なければ、社會の活動は、自ら圓滿に運行し、内には不和や衝突が減り、外には發展や躍進が加はり、國民の生活は安定して、國家の隆昌は確保されるのである。

〔心理學綱要終り〕

## 附錄 練習問題

### 第一篇 心身の相關

#### 第一章第二章及び第三章

- 一、心理學とは何か。
- 二、教育上心理學の知識の必要な理由を述べよ。
- 三、内省によつて心意と身體との不可分關係を述べよ。
- 四、幼兒に於ける心身相關の發達を述べよ。
- 五、運動機關と腦髓との相關的發達について知れるところを挙げよ。
- 六、兒童・青年に於ける心身相關の發達を述べよ。
- 七、機能としての心身の相關を述べよ。

### 第二篇 認識

#### 第一章第二章及び第三章



- 一、認識とは何か。
- 二、意識とは何か。
- 三、対象とは何か。
- 四、意識と無意識とを簡単に説明せよ。
- 五、注意とはどんな働きか。
- 六、注意を惹起させる条件を挙げよ。
- 七、注意の律動とは何か、例を挙げて説明せよ。
- 八、注意を持続させる工夫について述べよ。
- 九、注意の範囲について知れるところを挙げよ。
- 一〇、注意の身體的調節について知れるところを述べよ。
- 一一、第二次無意注意とは何か。

#### 第四章

- 一、感覺とは、どんな働きであるか。
- 二、感覺の種類を挙げよ。
- 三、溫覺、冷覺、痛覺、及び壓覺を簡単に説明せよ。

- 四、味覺とは、どんな感覺であるか。
- 五、嗅覺とは、どんな感覺であるか。
- 六、聽覺とは、どんな感覺であるか。
- 七、音の種類を挙げよ。
- 八、音の性質を簡単に説明せよ。
- 九、視覺とは、どんな感覺であるか。
- 一〇、視覺の種類を挙げて、簡単にこれを説明せよ。
- 一一、明度、色調、及び飽和を説明せよ。
- 一二、色の對比とは何か、實例を挙げて説明せよ。
- 一三、殘像の種類を挙げて、これを説明せよ。
- 一四、色盲を検査する理由を述べよ。
- 一五、視野とは何か。
- 一六、有機感覺とは何か。
- 一七、運動感覺の性質を述べよ。

#### 第五章



- 一、知覺の意義を問ふ。
- 二、知覺の主な種類を挙げよ。
- 三、空間知覺とは何か。
- 四、位置の知覺は、いかにして成立つか。
- 五、大いさの知覺は、いかにして成立つか。
- 六、距離の知覺の成立を説明せよ。
- 七、時間知覺とは何か。
- 八、急ぎの用事の時は、乗つてゐる汽車や汽船を遅く感ずるのは何故か。
- 九、人を待つてゐる時や成績の發表を待つてゐる時は、時間を長く感ずるのは何故か。
- 一〇、錯覺とは何か。
- 一一、例を舉げて末梢的錯覺を説明せよ。
- 一二、例を舉げて中樞的錯覺を説明せよ。
- 一三、幻覺とは何であるか。
- 一四、夢の起因を説明せよ。
- 一五、兒童の知覺の發達について述べよ。

第六章

- 一、觀念とは何か。
- 二、感覺と觀念との差異點を挙げよ。
- 三、把住及び再生の意義を問ふ。
- 四、觀念再生の種類を挙げよ。
- 五、觀念の聯合とは何か。
- 六、觀念聯合の法則を挙げよ。
- 七、觀念聯合の條件を列舉せよ。

第七章

- 一、記憶の作用の四過程を述べよ。
- 二、記憶の種類を舉げて、簡単にこれを説明せよ。
- 三、記憶の個人差について述べよ。
- 四、忘却の性質を説明せよ。
- 五、想像とは、どんな働きであるか。
- 六、想像と記憶との相違を挙げよ。



- 七、想像と聯合との關係を説明せよ。
- 八、程度の上から見て、想像の種類を挙げよ。
- 九、空想・妄想及び理想の相違を心理學的に説明せよ。
- 一〇、想像の價値と弱點とを挙げよ。
- 一一、想像と遊戯との關係を述べよ。
- 一二、藝術の鑑賞・創作と想像との關係を述べよ。

第八章

- 一、思考の意義を問ふ。
- 二、概念の意義を述べよ。
- 三、心理的概念と論理的概念との區別を明かにせよ。
- 四、判斷の意義を述べよ。
- 五、判斷と知的作用との關係を述べよ。
- 六、推理の意義を問ふ。
- 七、推理の種類を挙げよ。
- 八、思考と言語との關係を述べよ。

九、身振語とは何か。

一〇、未開人の言語について知れるところを述べよ。

第三篇 感情

第一章及び第二章

- 一、感情とは何か。
- 二、簡單感情の意義を問ふ。
- 三、感情の三方向について述べよ。
- 四、簡單感情の種類を挙げよ。
- 五、簡單感情の表出について述べよ。

第三章

- 一、情緒の意義を問ふ。
- 二、情緒と疲勞・飢渴との相違點を挙げよ。
- 三、情緒の時間的經過を説明せよ。
- 四、情緒が心意に及ぼす影響を述べよ。



- 五、表情について知れるところを記せ。
- 六、情緒の身體的表出について、その主な點を列擧せよ。

#### 第四章

- 一、情緒と情操との異同を述べよ。
- 二、知的情操の性質を説明せよ。
- 三、美の要素について知れるところを記せ。
- 四、美的情操の種類を擧げよ。
- 五、道徳的情操の性質を簡単に説明せよ。
- 六、良心を心理學的に説明せよ。
- 七、宗教的情操とは何か。

### 第四篇 意志

#### 第一章及び第二章

- 一、廣義に於ける意志發動とは、どんな働きであるか。
- 二、心意の管理を要する有無多少によつて、運動を類別せよ。

- 三、直立に於ける運動習得の順序を説明せよ。
- 四、試行錯誤法とは何か。

#### 第三章及び第四章

- 一、衝動と本能との關係を問ふ。
- 二、衝動と本能との異同を述べよ。
- 三、反射運動と本能運動との區別を擧げよ。
- 四、本能の種類を擧げて、その主なものを簡単に説明せよ。
- 五、執意とは何か。
- 六、意志作用の過程を説明せよ。
- 七、意志の發達について述べよ。
- 八、意志の強弱とは、どんなことを意味するか。

#### 第五章及び第六章

- 一、習慣とは何か。
- 二、習慣は、いかにして形成されるか。
- 三、人生に於ける習慣の重要性を述べよ。



- 四、性格の意義を問ふ。
- 五、性格の成立する過程を解明せよ。
- 六、性格學とは何か。
- 七、性格の種類を挙げよ。
- 八、氣質の意義を問ふ。
- 九、氣質の種類を挙げて、簡単にこれを説明せよ。
- 一〇、血液型とは何か。
- 一一、個性とは何か。
- 一二、個性の廣狹二義を明かにせよ。
- 一三、個性は、いかにして成立するか。

### 第五篇 社會の心理

#### 第一章及び第二章

- 一、社會心意とは何か。
- 二、社會心意と個人心意との關係を述べよ。

- 三、社會意志の意義を問ふ。
- 四、社會意志の活動の姿について種類を挙げよ。
- 五、社會意志の發達と個人心理の發達とを比較して挙げよ。

### 第六篇 環境の心理

#### 第一章第二章及び第三章

- 一、環境の廣狹二義を問ふ。
- 二、心理的場とは何か。
- 三、心理的場の具體的な力について述べよ。
- 四、幼兒の性格に對する環境の影響を説け。
- 五、素質と環境との關係を説明せよ。
- 六、環境の整理とは、いかなることを意味するか。

### 第七篇 學級の心理

#### 第一章第二章及び第三章



- 一、學級の性質を心理的に説け。
- 二、學級の心意構造を挙げよ。
- 三、學級に働く心理關係の主なものを列舉し、簡単な説明を加へよ。
- 四、學級の性格の發達する順序を略述せよ。
- 五、學年の高下に應ずる學級教育上の注意を挙げよ。

### 第八篇 學習の心理

#### 第一章及び第二章

- 一、學習の意義を問ふ。
- 二、消極的適應とは何か。
- 三、條件反射とは何か。
- 四、試行錯誤による學習を説明せよ。
- 五、觀察による學習の成立を説明せよ。
- 六、思考による學習の成立を説明せよ。

#### 第三章及び第四章

- 一、作業曲線とは何か。
- 二、作業の進行に影響を及ぼす主な條件を挙げよ。
- 三、學習效果の標式について知れるところを記せ。
- 四、學習の效果を増大ならせる條件を列舉せよ。
- 五、疲勞とは何か。
- 六、疲勞進行の段階を述べよ。
- 七、休息の心理學的意義を問ふ。
- 八、睡眠の必要な理由を説け。

### 第九篇 心性考査

#### 第一章第二章及び第三章

- 一、心性及び心性考査の意義を問ふ。
- 二、知能とは何か。
- 三、知能の性質上の差異について述べよ。
- 四、材能の種類を挙げ、且簡単な説明を加へよ。



- 五、知能の分量上の差異を調べる方法の要領を挙げよ。
- 六、知能の遺傳について知れるところを記せ。
- 七、情意及び情意検査の意義を問ふ。
- 八、我が國に於ける情意検査の眼目を問ふ。
- 九、情意検査の方法として、今日までに行はれたものを挙げよ。
- 一〇、心性検査の教育上への活用について述べよ。
- 一一、品等法とは何か。
- 一二、診檢法とは何か。

### 第十篇 發達の心理

#### 第一章第二章第三章及び第四章

- 一、心意發達の意義を問ふ。
- 二、心意發達の段階を挙げよ。
- 三、幼兒期の心意生活について概説せよ。
- 四、幼兒期が未分化統一期と稱される所以を問ふ。

- 五、幼兒の情緒について主なものを挙げて、簡単に説明せよ。
- 六、幼兒に現れる欲求の主なものを挙げて、簡単に説明せよ。
- 七、幼兒の知覺について述べよ。
- 八、幼兒の注意について述べよ。
- 九、幼兒の記憶について知れるところを記せ。
- 一〇、幼兒の想像について知れるところを記せ。
- 一一、幼兒の思考について知れるところを記せ。
- 一二、幼兒の遊戯及び運動について述べよ。
- 一三、幼兒に於ける數の發達の段階を挙げよ。
- 一四、幼兒に於ける言語發達の段階を挙げよ。

### 第三章

- 一、兒童期の心意生活を概説せよ。
- 二、兒童期が分化不統一期と稱される所以を問ふ。
- 三、兒童の情緒について主なものを挙げて、簡単に説明せよ。
- 四、兒童に現れる欲求の主なものを挙げて、簡単に説明せよ。



- 五、兒童の知覺について主な點を述べよ。
- 六、兒童の注意を述べて知覺發達の段階を挙げよ。
- 七、兒童の記憶について知れるところを記せ。
- 八、兒童の注意について知れるところを記せ。
- 九、兒童の思考について知れるところを記せ。
- 一〇、兒童の遊戯について知れるところを記せ。
- 一一、兒童の作業が遊戯から分離して來る關係を説け。
- 一二、兒童と環境との關係を説明せよ。
- 一三、要點を舉げて兒童期の特色を説け。

第四章

- 一、青年期の心意生活を概説せよ。
- 二、青年の感情について特色を挙げよ。
- 三、青年の感覺知覺を簡単に述べよ。
- 四、要點を舉げて青年の思考を略述せよ。
- 五、青年の想像について述べよ。

- 六、青年に於ける自我の發見について知れるところを挙げよ。
- 七、青年に於ける道德意識の發達を述べよ。
- 八、青年に於ける宗教意識の發達について述べよ。
- 九、青年に於ける政治意識の發達について述べよ。
- 一〇、青年に於ける職業意識の發達について述べよ。

第十一篇 職業選擇の心理的基礎

第一章第二章及び第三章

- 一、職業の兩前提を挙げよ。
- 二、職業の分化とは、いかなる意義なるか。
- 三、性能の個人差は、いかにして生ずるか。
- 四、職業の分析及び適性検査の意義と必要とを述べよ。
- 五、適性検査と心性考査との異同を辨ぜよ。
- 六、適性検査の諸方法を列舉せよ。
- 七、主な條項を舉げて、適性適職の個人的効果を説明せよ。



用科育教校學範師 日三十二月二十年三十和昭

濟定檢省部文

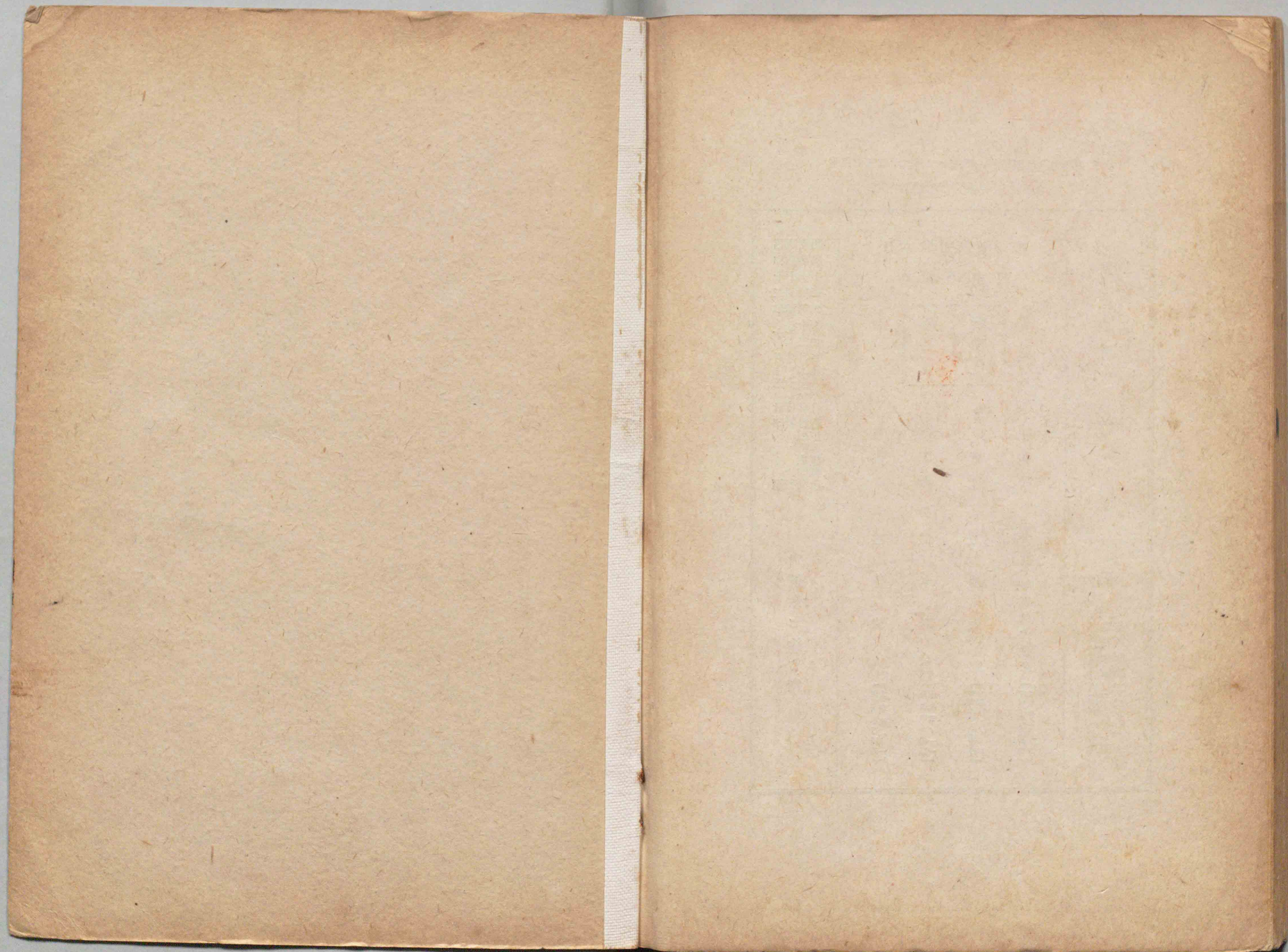
發 行 所	書科教新育教本日			昭昭昭昭
	要綱學理心			和和和和
培 風 館	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">           著 者 章 有 所         </div>			三三三三
	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">           著 者 章 有 所         </div>			年年年年
館	印刷所	印刷者	發行者	十十二月
	大日本印刷株式會社	刀 禰 太 郎	山 本 慶 治	月 月 月 月
振替東京三二六一七				十 十 十 十
				五 五 五 五
				日 日 日 日
				訂 訂 發 發
				正 正 再 再
				版 版 發 發
				行 行 刷 刷
				定 價 金 七 拾 七 錢

〔東京市神田區錦町三丁目〕  
電話神田三七七四  
振替東京三二六一七

八、主な條項を舉げて、適性適職の社會的效果を説明せよ。

〔附錄終り〕







庫  
8  
44

広島大学図書  
2000022344  
